

文士というものは自分が引き受けた
運命というものが書けないといけない

小林秀雄

人間界は一つの美しい本に帰着するために
造られたのです
マラルメ

二〇三一年、四月四日、午後十時。

外務大臣梓次郎七十七歳は、外見は超高級ビジネスホテルと変わらない、渋谷の高級ラブホテル「H」のロビーに居る。

梓の恩師「松本玄信大先生」亡き後も、「ドン松本」を名乗る霊媒師から、時として遺稿が届く。

それは、松本玄信大先生の意向であり、むろん威光のあるものであった。

梓は首相の意向以上にそれを重視していて、梓が時としてスタンドプレイだとマスコミから叩かれるのもそのせいである。

けれどもその意向を全うする前後に、どこからか垂涎もののプレゼントが届く。

それは巨額の金銭や株券だったり、大臣の権威でもどうにもならないプレミアチケットだったり、どうあがいても手が届かない美女だったりする。

そして今夜は、そういう美女にありつけるはずなのだ。

約束までまだ二時間もあるのに、バイアグラを改良した最新ED治療薬を、処方薬の三倍も服んだ梓次郎は、上からも下からも涎が出てくるのを留められなかった。

文科大臣大林寛五十九歳は、「H」の一室「鏡の間」に居る。

梓次郎と同じ理由で、ここで待機しているのだ。

約束までまだ一時間もあるのに、円形ベッドであぐらをかいた全裸の大林寛は、アダルトビデオを観ながら、ママシドリンクをもう十本も空けていた。

まだ自分では気づいていないが、たらりと鼻血も出ている。

環境大臣中山啓六十三歳は、「H」の一室「乱の間」で双子美人と3Pの実演中である。

詳細に描写すると、この章はエロ小説になっちゃうので、否そんなことより作者として羨ましくて我慢ならんので、基本的に忠実に必要最小限の部分をピックアップ

するのみとする。

上から下から前から後ろから横から斜めから、全裸の双子美人に攻められ、中山は（閨房に於いてふつうなら女性の専売特許である）「死ぬー」をすでに三百三十三回も発していた。

それだけ叫べば死にそうなものなのに、どういうわけか中山は益々盛んになってきて、ついに双子美人の（姉だか妹だか解らないが）どちらかが泡を吹いて悶絶してしまった。

慌てた双子美人の片割れは、中山が止めるのも聞かずにフロントへ連絡。

すると、

「おやまあ」

すぐにやってきた、ラブホテルのおばさん従業員に、救急車を待つ間に、身なりを繕う前に、スマホで何枚も写真を撮られてしまった。

おばさん従業員はあれこれ理屈をつけて、双子美人の片割れを連れ廻し、「鏡の間」の大林寛もロビーの梓次郎も撮ることに成功した。

お察しの通り、そのおばさん従業員こそ、郷田狂介探偵であるが、どうしてそういう者に化けられたかという、それは郷田探偵事務所の機密事項なので、愛読者にも教えられない。

泡を吹いた双子美人の片割れが、救急車で赤坂緊急救急病院に運ばれると、親代わりだと言って、麻暮正作が化けたぬらりひょんが、まさにぬらりひょんとICUに現われた。

ぬらりひょんは、医師に袖の下を渡し、双子美人の片割れの割れ目のなかに残っているはずの体液や、その白い肌に汗とともにへばりついている唾液の、DNA鑑定を求めた。

そして付き添って来た双子美人の片割れから、三大臣との交渉時の録音テープを当然のごとく受け取った。

こうして三大臣の、醜聞と収賄の確たる証拠が麻暮と郷田の手に入った。

二〇三一年、四月十日、午前十時。

郷田邸の二階で、麻暮正作はおかめの面を付けて、赤ちゃんの麻子をあやしている。

その横で、大介におっばいをあげている猪鹿蝶子が微笑んでいる。

階下で郷田狂介が麻暮を呼んだ。

麻暮は、娘を蝶子に頼んで階下に降りて行った。

郷田はソファにふんぞりかえって、テレビでニュースを観ている。

「麻暮さん、梓、大林、中山の、助平三大臣が辞めたわよ。」

これで内閣も壊滅状態、新型原発の湘南誘致は下火になるどころか、白紙に戻ったわね」

麻暮も隣に坐って、

「ケケッケ。

けれど、いい思いをしたのは、中山だけじゃなかったっけ」

「それがさあ、あたしに云わせると、ああいうものは、やっているときより、やったあとより、やるまえがいちばんうれしいのよん」

「そういうもんですかね。

けれど、ボクらがうまくやったというよりは、余りにも呆気なさすぎる」

麻暮は首をひねった。

荒野相手に、今までこれほど容易かったことはない。

「そうね、だいたいね。

西園寺金時が、沈黙を守っているのが無気味だわね」

「双子美人も、肌は顕わしたが、まだ本性は顕わしていないから、ちょっと無気味ですかね」

ここで郷田は、麻暮をしげしげと視て、

「無気味といえば、麻暮さんのおかめのお面、ちょっと無気味じゃな一いの」

「そうかな、無気味かな」

「だってさ、おかめに髭なんか生えてたかしらん」

「ケケケ、いやはや。

ママとパパの合体として、生やしてみたんですよ。

麻子はご機嫌だったけどね」

「そんならいいけどさあ。

でも当分鉄仮面はお預けで、この無気味なおかめの面とのおつきあいね」

「無気味な、というのは勘弁して下さいよ。

おかめの面、すなわちボク〈オカメン〉と呼んでほしいな」

麻暮は戯けた。

「〈オカメン〉かあ。

イケメンみたいでわるくないわね。

そんなら、オカメン誕生を祝って、あたしオカマンが、高一い高一いワインでも開けるかな一」

哄笑しながら郷田は、立ってワインクーラーに向かった。

二〇三一年、四月十三日、午後五時。

郷田狂介は、西園寺金時からの電話を受けている。

郷田の顔色が変わっている。

「やれるもんなら、やってみなさいよ。

こっちには、麻暮さんがいるんだからね」

郷田が烈しく怒鳴った。

そして事務所用の電話器を叩き付けた。

二階から〈オカメン〉麻暮正作が、何事かと顔をのぞかせる。

「郷田さん、どうしたんですか。

そんな声出したら、赤ちゃんが怖がるでしょう」

「ごめんごめん、めんごめんご。

頼んでもいないのに、西園寺が、いえ荒野大人が、双子美人を送るって云うのよ

一。

美人局として送るんじゃないくてさー、復讐の刺客として送るんだってさー。

ふざけたぬらりひょんね」

郷田はまだ興奮している。

「ケケケ。

荒野め、切羽詰まってきたな。

不意打ちではなく、予告があるだけ、いいじゃないですか。

それで、いつですか」

「こんばん、深夜だってさー。

くそつたれめ、返り討ちにしてやるわー」

「まあまあ、まだ充分時間はあります。

冷静沈着に、迎え撃つ準備をしましょう。

復讐の刺客と云ったらしいけど、ボクにはそれだけとは思われませんね」

「というと」

「荒野の狙いは、おそらくお蝶さんと大介くん」

「なるへそ、拉致ね」

「だからボクらがまずやることは、決して見つからないところに、お蝶さんたちを隠すこと」

郷田は鼻をうごめかせて、

「それなら大丈夫、うちの地下は、針の穴、じゃない、蟻の穴よ」

「ケケ、穴と云えば穴場。

地下はパスタの店なの、それともラーメンの店」

「麻暮さんったら、さすがに情報通、しかも化石情報」

「ケケケ。

ボクを幾つだと思ってるの。

とにかくその蟻の穴に隠すんですね」

「そう、あそこに入ったらだれも戻れない。

いわば地獄の迷路よ」

「ということは、お蝶さんたちも戻れないわけ」

「まあ、そういう建て前になっているけどさ。

そこはそれ、勝手知ったる蟻の穴」
「ともかくそこは安全なんですね」
「安全、のみならず、空調、暖冷房完備、衣住食の心配なしよ」
「ケケ、そんならボクもそこへ。
麻子といっしょに」
冗談なのかどうか、麻暮は腰を浮かせた。
「おっと、麻暮さん、あたしたちは闘わないといけないでしょ」
「女相手となると、モチベーションがね」
「触れなば落ちん餅肌よん。
あたしがオカマじゃなかったら」
「ボクを幾つだと思ってるの」
「幾つかは知らないけどさ、百歳をはるかにこえて、子供つくるってことは知ってるわよ」
「あれは、その、あの、つくるというより、つくらされた、というか」
麻暮の〈オカメン〉顔が情けなくなった。
「弁解云うようになっちゃあ、天下の麻暮大先生もヤキがまわったわねえ」
「ケケケ、そうかもしれない、そうじゃないかもしれない。
で、双子美人の武器は何でしょうかね」
郷田は少しだけ考えて、
「あいつらは肉体が武器よ。
それ以上の武器はないわ」
「なるほど。
では、ボクらの武器も肉体」
「ってわけにはいかないわ。
超後期超高齢者と超オカマだもん。
そうそう、先祖伝来の槍と弓矢と剣と手裏剣があるわ」
「それは凄い。
先祖は武士か忍者か」
「趣味人か骨董商か」
「で、鎧もあるんですか」
「鎧は、別館を作るときに売っちゃったわ」
「ボクは鎧がいい、鎧が欲しかったなあ。
鎧、鎧、鎧」
「ヨロヨロして涎垂らすようになっちゃあ、天下の麻暮大先生もヤキがまわったわねえ。
いいわよ、まずはあたしが迎え撃つから。
女はどんだけ頑張ってもさ、オカマにゃ適わないことになっているのよ。
万一あたしが不利になったら、そのとき真打ち登場ってことでいいわよ。
それまでは、麻子ちゃんを寝付かせてくれれば」

郷田が苦笑すると、麻暮は素直に、
「おまかせします」
と云った。

二〇三一年、四月十四日、午前一時。

双子美人は、郷田邸の二階の屋根に居る。
ふたりとも全裸で、武器も何も手にしてはいない。
お互い目配せして、ガラス窓をぶち破り中に入る。
二階の階段上から、階下の郷田狂介を揃って一瞥すると、代わる代わる宙を飛んだ。

今回の郷田の武器は手製の手裏剣である。

手裏剣が目一杯詰まった革袋を首からぶら下げて、次々と双子美人に向けて投げ付ける。

郷田の放った手裏剣が、双子美人の柔肌に食い込むと、鮮血が迸る。

二の腕、太股、脇腹、肩口などをやられた双子美人は、それでもひるまずに全裸で宙を飛んでいる。

その際、両足を開いたときに、股間から淫水を噴射させる。

淫水が当たった箇所は、どこも焼けて穿たれ、小さく炎も上がっている。

「やるならやれ、この化物めー。

火災保険たっぷり入っているから、へいちゃらよ」

郷田は強がったが、両手首に淫水を注がれると、手裏剣の革袋を放り投げて、火傷治療薬を探すために部屋中を彷徨った。

(これって未来的じゃないわね、伝奇的な闘い。

なんか山田風太郎の小説みたい)

と思った途端、その脳天に淫水を喰らい、髪の毛が燃え上がり、脳味噌も燃え上がった気がした郷田は、冷蔵庫の扉を開けて、首を突っ込んだ。

「頭隠して尻隠さず」

とか何とか云ったかどうかは別として、双子美人の淫水は郷田の臀部に集中した。

「そこよそこ、もっともっと」

とか何とか云ったかどうかは別として、

「麻暮さんが、鎧、鎧、鎧って云ってたの、めっちゃ予言的だわ」

なんてつぶやいたことは確かである。

いずれにしても、

(万一がきちゃった)

と思いつつ、郷田は口には出せなかったが、麻暮正作に心中で助けを求めた。

双子美人の攻撃は益々熾烈を極め、このままでは郷田の焼死は時間の問題となった。

「麻暮さーん」

郷田が断末魔の声を発する前に、真打ちは登場した。

背に赤ちゃんを負い、両手に一本ずつ長槍を掴んだ麻暮は、

「ケケケッケー」

鋭い掛け声と共に、長槍を繰り出した。

その二本の凶器は、双子美人の各々の股間から脳天までを刺し貫き、双子美人はあえなく即死した。

二〇三一年、四月十四日、午前二時。

郷田狂介は郷田邸の一階ソファで、麻暮正作の手当てを受けている。

「ケッケ、お尻がこんなに焦げちゃあ、オカマ廃業ですねえ」

「麻暮さんったら、お手当て乱暴すぎ。

双子美人のやっつけ方も乱暴すぎ。

背中の子ちゃんにとって、トラウマになっちゃうわよ」

「安眠してましたよ」

「とにかくお蝶さんに叱ってもらおうわ。

すぐに呼びましょね」

郷田は痛みを堪えて、スマホメールで猪鹿蝶子に連絡をした。

返信はすぐにあったが、それは蝶子からではなかった。

西園寺金時からであった。

【蝶子と大介は、わしがいただいたがの。ちなみに、あんた方はわしの秘書を双子美人と呼んでいるようじゃがの。じつは双子美人が二組、つまり本来四つ子美人で
のう。蟻の穴じゃろうがケツの穴じゃろうが、関係ないで
のう。それにしても酷い殺し方をしてくれたもんじゃ。蝶子と大介を拉致した方の双子美人が、敵討ちをしたいと、血の涙を流しとるのを忘れぬことじゃがの。ただ、しばらくは親子三人、のんびりと暮らしたいがのう。復讐に燃える、残された双子美人をどう説得するかが問題かのう。それでは残虐な麻暮さんによろしく】

郷田は麻暮にスマホの画面を見せた。

「いずれにしても、しばらくは、あたしたちものんびりできるってわけね」

「まあ、このさいだから親子三人水入らずの時間を作ってあげるのは、功德かもしれないね。

お蝶さんは、荒野のところにいきたいと思っていたんじゃないかな。

いまは麗子さんもないし、麻子の面倒まで見るのは大変だし。
なによりも、赤ちゃんを父親に見せたいのは母親の本能ですよ。
なんとなくボクは、そう考えていましたよ」

「あたしもよ。

それにしても、蟻の穴によく侵入できたわね」

郷田は首をかしげる。

「それは、つまり、もう一組の双子美人は、蟻に変身できるのかもしれませんが」

麻暮は当てずっぽうに云った。

「あ、そうか。

あの連中だから、それはアリかも。

となると、こんど襲ってくる双子美人は毒蟻ね」

「蟻が苦手なもの、知っていますか」

「あたしの子供のころ、いたずらして、蟻の巣に水を流しこんだわね」

「やりましたか。

それならまたやりましょう。

とりあえず念のため、蛇口にはすべてホースを取り付けておきましょう」

しばらくして郷田は痛みがおさまったのか、快活な声で、

「いま気づいたんだけどさあ。

どうして蛇口は、蛇の口って書くのかしら。

鎌首持ち上げた感じだからかなあ。

水の出る音がシャーって、蛇が口を開いて唸る音に似ているからかなあ」

「どうして蛇口が気になるの」

「だってさあ、双子美人の吊り上がった目がね、蛇の目に見えたんだもの」

「そんなら、蛇の目傘も気になるのかな。

蛇口はさ、バルブ部分が蛇腹だから、その口は蛇口ということになったんだと思うけど、水栓とか水口とか云った方が妥当ですね」

「日本語ってさあ、どうにも気になってしまう、言葉とか漢字とかあるわよね。

そのいいかげんさって、日本人のいいかげんさに繋がらないかしら」

「いいかげんと云っても、良い加減って切り口もあるんだから、人それぞれの見方なんじゃないですか。

ケケケ、郷田さんったら、急にそんなこと云い出して」

麻暮が苦笑すると、郷田も苦笑した。

「妙ですか、妙でしょうね。

あたしはさあ、オカマって言葉も我慢できないのよね。

それって〈釜〉からきてるんでしょ。

でもさあ、釜とか鍋とか、日常的すぎないかしらん。

オカマってさ、いつも非日常を生活しているんだけど」

「ううむ、それならあえて云いますがね。

郷田さんは日本で生きるのが似合わない、以前よりボクは感じていましたよ。フランスとかイタリアとかが似合っているかなあと」

郷田は再び快活な声で、

「よくぞ云ってくれたわ、麻暮さん。

あたしはこれでも外国語が得意だからさ、今回の事件が片づいたら外国に移住しようかって、マジで考え始めているのよ」

麻暮も真面目に受けて、

「ボクはけっこう長くインドにいたから、アフリカなんかも似合っていると思ったけど、さすがにヨーロッパは肌に合いそうにない。

ヨーロッパが似合う人は羨ましいですね。

ボクとはちがって、郷田さんは将来のある人だから、今回の事件云々は関係なく、いまこそ行くべきですよ」

麻暮の口調は珍しく熱を帯びていた。

「よくぞ云ってくれたわ、麻暮さん。

あたしはさあ、外国に逃げ出したい、と云うよりも、ととてもとても疲れちゃったのね。

ううん、みんなの世話を疲れたんじゃないかってさ、みんなの死に疲れちゃったのよ。

あたしはさあ、麻暮さんみたいに、たくさんの死に慣れていないの。

これら〈なしくずしの死〉と云った感じが、我慢できないのよ」

かつて【死んだる団】事件ののち、敬愛する先輩探偵の舟木英介がハワイに移住したことを、いまになって郷田はよく理解できた気がした。

けれども、舟木と共に【死んだる団】事件に深く関わった麻暮の前では、そのことは云い出せなかった。

第二部／第二章／第二項

彼は美しい

解剖台の上でのミシンと雨傘との偶発的な出会いのように
ロートレアモン

日も暮れよ 鐘も鳴れ 月日は流れ 私は残る
アポリネール

二〇三一年、七月十四日、午後一時。

郷田狂介は郷田邸の門前にいる。
足元にキャリーバッグがふたつ。
いよいよ旅立ちなのだ。
麻子をだっこした麻暮正作が見送る。

六月三十日に早くも梅雨は明け、七月一日から記録的な厳しい猛暑に入った。
葉山、鶴沼、江ノ島、七里ヶ浜、稲村ヶ崎、どこの砂浜も裸足では歩けない。
太陽は黄金色に輝き、四十一・五度の日もあった。
これは湘南の最高記録である。

そんな季節に郷田は、白のサマースーツに白のソフト帽、白のエナメルシューズ
という出で立ちで、すべてブランド品である。

Tシャツに短パンにサンダルという麻暮は、
「ケケ、成田に着く前に、燃え上がりそう」
「パリに行くんだから、あたしの心はとっくに炎よん。
いえ、あたしがパリに行くんじゃないの、パリがあたしを呼んでいるのよ。
翼よ、あれがパリの灯だ」

郷田は嬉々として言ったが、どこか淋しそうでもあった。
「約束通り、毎月フランスの絵葉書頂戴。
それと、水が変わるから、身体にだけは気を付けて」
「あいよ。

麻暮さんも、荒野が動き出したら、約束通り国際電話ね。
家は好き勝手に使って、必要経費はぜんぶあたしのツケで」
「そんなわけにもいかんが、甘えさせてもらうよ」
「麻暮さんは、〈オカメン〉だけでも熱くて大変そう。
クーラーががんがつけて、熱中症にならないように」
「ボクは不死身だが、麻子のことは充分気をつけるよ」
待機していたタクシーの運転手が、キャリーバッグを
積み込んだ。

「こんなときだから、麻暮さんだけに白状するけどさ。
あたしはさあ、西行に憧れているのよん」
「そんな気はしていましたよ」
「あら、そうなの、びっくりこん。

でもさ、本当は楠木正成か真田幸村になりたかったのよん。
でもさ、麻暮さんを身近に知って、これはきっと、楠木正成か真田幸村の生まれ
代わりだと思って、諦めたのね」
「ケケケ、ボクはせいぜい竹中半兵衛か黒田勘兵衛。

郷田さんは充分、現代の正成、現代の幸村ですよ」

麻暮の優しい声に、郷田は涙ぐんだ。

「旅立ちに涙は禁物ね。

生まれ変わった郷田狂介を、麻暮さんに見せたいわ。

尤も今回は永住のための下見にすぎないから、山風さんにあれこれ尽力してもらったけど、半年以内には一旦帰国するわね。

じゃあ再見」

郷田はタクシーに乗り込んだ。

「そう、お別れじゃない、サイチェンです」

麻暮は腰をかがめて声をかけた。

二〇三一年、七月二十日、午後一時。

麻子が寝付いたので、麻暮正作は、郷田邸の庭で水撒きをしている。

玄関先もやろうとすると、どこからか鋭い音をたてて矢が飛んできた。

麻暮が咄嗟に避けると、矢は水を撒いた緑の芝生に突き刺さった。

ほぼ瞬時に、一メートル四方の芝生は茶褐色に変貌した。

(ケッケ、思った通り毒矢だな)

麻暮が嘲笑ったのは、念のために強い解毒剤を飲んでいたので。

次の矢も避けたが、それは郷田邸の壁に当たって、ほぼ瞬時に燃え上がった。

それをホースの水を吹きかけて消し、麻暮が見回すと、五百メートルほど先の櫟の樹の梢に、意地悪な鳥さながら双子美人がとまっていた。

早速ホースの先に特殊器具を取り付けた麻暮は、双子美人を的に水鉄砲を噴射させた。

見事命中し双子美人は樹から落下した。

そのまま大人しいので近寄ってみると、打ちどころが悪かったとみえ、ふたりとも失神していた。

麻暮は小脇に各々を抱えると、郷田邸に戻り、エアコンをきかせた居間のソファに寝かせた。

それからワインを口移しで飲ませた。

ふたりとも紅い顔をして覚醒した。

「あなた、もしかして」

双子美人の片割れが云うので、

「ケケ、麻暮正作だよ」

「そんなこと、知ってるわ。

もしかして、変なことしなかった」

片割れは疑り深い目で見ると、

「変なことをした覚えはないが。
変なことって、たとえば」
「たとえば、眠っている間にレイプとか」
「阿房か、ボクは女に飢える歳じゃない」
「でも軀が変なのよ」
「それは、ボクがワインを飲ませたからだ。
気付け薬の代わりだよ」
「ワインを、どうやって」
また疑り深い目で見ると。
「どうやってって云われてもねえ」
麻暮の〈オカメン〉も紅潮してくる。
「まさか」
「だって、それしかないだろ」
双子美人揃って、
「だれにも許したことの無い唇を」
美人は怒ると般若になる。
「すまん、すまん、乙女の唇を。
でもさ、ボクの唇じゃない、〈オカメン〉の唇だから、ご勘弁」
麻暮が小さい軀を益々小さくするので、双子美人はお互い小さな顔を見合わせ、
思わず微笑した。
こうなるともはや、戦闘の緊張感は雲散霧消している。

麻暮は、双子美人に氷イチゴを作ってあげた。
「ボクの猛暑対策は、この氷だね。
その日の気分で、氷メロン、氷レモン、氷アズキ、氷ミルクも。
最近では氷キントキばかり作っているが、ここでは出せないよね。
君たちの猛暑対策は何かね」
双子美人は、氷イチゴを喜びながら、
「何もしないことね。
何もしないでじっとしていること」
「なら、そうしていればいいのに」
「でも、西園寺様が、そろそろ敵討ちじゃ、と云うので」
「お蝶さんが大介くんと居るはずでしょ。
聞かれるかもしれないのに、そんなこと云うのかい」
「西園寺様はメールで指示をするの」
「しかし、それって偽メールかもしれないじゃないか」
「あの口調は簡単には真似ができないわ」
「ケケケ、なるほど」
麻暮はしきりに頷きながら、云うべきことだけは云おうと思った。

「君たちの姉妹には、とてもすまないことをした。
いや、亡くなった者以上に、残された君たちに、とてもすまないことをした。
ボクだって、殺したくはなかったんだよ。
何とか怪我くらいですませないだろうか。
それにしても、君たちの姉妹は強すぎた。
殺らなければ殺られる状況だった。
でもねえ、ボクには母親のいない若い娘がいるから、死ぬわけにはいかないのさ」
あとき麻暮は、登場しなくとも問題ないと、はじめ楽観していた。
老婆心で登場しても、年寄りの冷や水くらいにしかならないのではないか。
だが、敵の攻撃の凄まじさに、このままでは郷田の命が危ないと直感した。
郷田が殺されたら、敵の勢いは益々増殖し、自分も、いや自分はともかくとして
も、麻子の命までも危ないと感じていた。
自分がどうなっても、郷田さえ無事なら、郷田は麻子の面倒を見てくれるはずだ。
だから、この危険な時期に、郷田が外国に行くことを熱心に勧めたのだ。
そのことも、麻暮は正直に話した。

静かに聞いていた双子美人は、どちらからともなく、
「あらためて猛暑対策を実行することにするわ」
と云った。
麻暮は心配そうな声で、
「このまま引き上げて、西園寺に叱られないかね」
「西園寺様は叱ったりする方ではないわ」
「しかし心の中はどうかね。
心ってやつは、見えないから厄介だ。
ボクは心ってやつが苦手だね。
君たちが可愛ってことは信じられるが、君たちの心が可愛いと云われても信じられない。
そうだ、郷田さんを亡き者にしたってことにしてはどうかね。
ケケケ」
(郷田さん、いまごろパリで、くしゃみしているかもしれないな)
黙って頷きながら、双子美人は音もなく去って行った。
双子美人がいなくなると、麻暮は麻子のミルクを作り始めた。

郷田邸の外に出た双子美人の片割れが、
「やばい、麻暮正作に惚れちゃいそう」
とつぶやくと、もうひとりが、
「やばい、ブルータスおまえもか」
と云った。

二〇三一年、七月三十日、午後四時。

郷田狂介は、ミラボー橋に佇んでいる。

右手前方に、エッフェル塔、左手前方には、凱旋門。

右手後方に、ノートルダム寺院、リュクサンブール宮殿、ソルボンヌ大学などの建物の天辺が見える。

目の錯覚かもしれないが、その上空に数羽の金色の鳩が舞っている。

左手後方には、こんもりとブーローニュの森。

目の錯覚かもしれないが、その上空に数羽の漆黒の鴉が舞っている。

ゴッホの絵を思い起こした郷田は、沢山ある有名美術館のどこにもまだ行っていないことに、いまさらながら気づいた。

ルーヴル美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館、ピカソ美術館、ロダン美術館、モロー美術館、近代美術館など。

郷田の傍をフランス人が足早に横切る。

みな目的があって歩くのであり、目的もなく佇む者は郷田のみ。

それなのにだれも、この異国の小人に興味を示さない。

当たり前なことだが、それが郷田には快くもあつた。

いまだきのパリジェンヌも通ったけれど、郷田は目もくれない。

フランス、パリに来て半月が経った。

プロヴァン、シャルトル、アミアン、ランス、ストラスブール、ブールジェ、ヴェズレー、アヴィニョン、アルル、トゥールーズと、地名くらいは知っていても、郷田はパリを動こうとしない。

とくに夜間は、壁に飾られた藤田嗣治の複製画の猫の目を見詰めたまま、部屋から一歩も出ない。

(やっぱりあたしは自閉症だわ。

あるいは井の中の猫、じゃない蛙)

そうは思ったが、結局はパリの空気が好きなんだと郷田は信じた。

信じようとした。

麻暮正作には約束通り絵葉書を出した。

それに「滞在許可証」と長期ビザを取るのを楽にしてくれた、山風元鎌倉署署長と、名所等を教えてくれた、パリ遊学経験のある喫茶店「帰路」の立原店主にも。

郷田は、毎日ミラボー橋に来て、セーヌ川の川面を眺め、モネやルノワールの描いたセーヌ川の絵を脳裡に浮かべたりしながら、モネやルノワールほどの画才があれば、自分も絵筆をとってみたいと思いながら、スマホで何枚も写真を撮った。

また、遠くの景色を眺め、物思いに耽るのを恒例としている。

苛酷だったここ数年の日々はもちろん、(ミラボーがフランス革命初期の政治家の名前から取っていることを知っているので) フランス革命の時代にも思いを馳せていたものである。

退屈な日々のなかで、この恒例を郷田は気に入っている。

郷田はミラボー橋にくるたびに、
【ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し】
と歌った萩原朔太郎のことを思い、
「大渡橋」
と名付けられた詩を思い出したものである。

【……………
われこの長き橋を渡るときに
薄暮の飢えたる感情は苦しくせり
ああ故郷にありてゆかず
塩のごとくにしみる憂患の痛みをつくせり
すでに孤独の中に老いんとす
いかなれば今日の烈しき痛恨の怒りを語らん
いまわがまずしき書物を破り
過ぎゆく利根川の水にいっさいのものを捨てんとす
われは狼のごとく飢えたり
しきりに欄干にすがりて齒を噛めども
せんかたなしや 涙のごときもの溢れ出で
頬につたい流れてやまず
ああ我れはもと卑陋なり
……………】

* * *

革命でも戦争でも、同じことだわ。
無血革命なんてのもあるけど、やっぱりどこかで、血は流れているんだわ。
人間は、血を見るのが好きなのね。
敵の血を見るのが。
でも、考えてごらんなさい。
敵と云ったって、人種が異なるか、宗教が異なるか、思想が異なるかだけでしょ。
異なるって云ったって、異星人ってわけでもあるまいし。
昨日の敵は、今日の友かもしれないし。
だいたい、敵って云うものが、殺害に価するものなのかしら。

もしかすると、抱擁に価するものかもしれないじゃない。
抱擁したくたって、血を流し、腐りかけた死体に抱擁なんかできないじゃない。
ふん、フランス革命のどこが立派なのかしら。

尤も、日本だって、明治維新のために、数え切れないくらいの人間が殺され、琵琶湖満タンくらいの血が流れた。

それで、明治維新ていどじゃあ、しょーがないじゃない。

ふん、明治維新のどこが立派なのかしら。

日本人は、おそらく、あそこで、トチ狂って、今日に至っているんだわ。

郷田は、いま世界中で盛んに戦争をやっている、すべての国、すべての民族、すべての人びとに、ミルトンの『失樂園』を読めと云いたかった。

【人間よ、恥を知れ、と私は云いたいのだ！ 呪われた悪魔でさえも、悪魔同志で固い一致団結を守っているのだ。それなのに、生けるもののなかで理性的な人間だけが、神の恩寵を受ける希望が与えられているにもかかわらず、互いに反目しあっている。神が、地には平和あれ、と宣っているにもかかわらず、互いに憎悪と敵意と鬭争の生活にあけくれ、残虐な戦争を起こしては地上を荒廃させ、骨肉相食んでいる始末だ】

* * *

郷田は夢を見た。

裁判官 あなたの職業はなんですか

被告人 探偵です

裁判官 だれがあなたを探偵だとみとめたのです
だれがあなたを探偵の一人に加えたのです

被告人 ならばだれがわたしを人間の一人に加えたんです

裁判官 あなたはそれを勉強したんですか

被告人 なにを

裁判官 人間になるための勉強ですよ
人間になるための学校にあなたは行こうとしなかったでしょう

被告人 考えてもみませんでした

裁判官 それならどうしたら人間になれるんですか

被告人 わたしの考えでは神から与えられるもの

裁判官 神は何も与えてはくれません
むろん人間ですらも

被告人 つまりわたしは人間でも探偵でもない

裁判官 そうは云っていません
人間ではない探偵かもしれませんが

被告人 あなたはわたしの何を裁きたいのですか

裁判官 あなたのゲンザイです

被告人 神を信じないわたしには原罪はありません

裁判官 原罪はなくとも現在はあるでしょう
この法廷ではあなたの現在を裁こうとしているのです

郷田は、
(ひたすら、さびしい)
と感じた。
ホームシックではない、異国の感傷でもない。
ひとりの人間として、
(さびしい)
のであった。
(かぎりなく、さびしい)
のであった。

郷田は、おそらく、いちばん好きな詩人である、村上昭夫の詩を思い浮かべた。

【三つの道を考えよう
ひとつの道はさびしい道
ふたつの道はさびしい道
三つ目の道はさびしい道
その道のことを考えよう】

巨人荒野 第二部／第二章／第三項

尋常一様の作戦にては見込み立たず
結局桶狭間とひよどり越と川中島とを併せ行くの已むを得ざる
山本五十六

ぼくらはお母さんの骸骨を屋根裏の梁に吊るし
その首に赤ん坊の骸骨を引っ掛けた
アゴタ・クリストフ

二度とこのようなことはすまいと心に誓ったなら
生涯同じ過ちを繰り返すことはしない
ガンジー

二〇三一年、七月三十日、午後五時。

フランスと云えば、アナトール・フランス。
この名前、日本ならさしずめ、日本穴太郎ね。
パリと云えば、エッフェル塔と、セーヌ川と、パリの西にある、このミラボー橋
かな。
グリーン・ブリッジ。
アポリネールのこの詩は、よく愛唱したものよ。

【ミラボー橋の下を
セーヌ川が流れ
私たちの恋が流れる
私は思い出す
悩みのあとには
楽しみがくると
日も暮れよ
鐘も鳴れ
月日は流れ
私は残る】

そして、マリー・ローランサンの絵を観に行った。

亦、パリと云えば、ボードレールの『巴里の憂鬱』。

【一お前は誰が一番好きか

云ってみ給え

謎なる男よ

お前の父か

お前の母か

妹か弟か

一私には父も母も妹も弟もない

一友人たちか

一いま君の口にしたその言葉は、私には今日の日まで意味の解らない代物だよ

一お前の祖国か

一どういう緯度の下にそれが位置しているかをさえ、私は知っていない

一美人か

一そいつが不死の女神なら、悦んで愛しもうしようが

一金か

一私はそれが大嫌い、諸君が神様を嫌うようにさ

一えへっ、じゃ、お前は何が好きなんだ

唐変木の異人さん

一私は雲が好きなんだ

あそこを、ああして飛んでゆく雲

あの滅法素敵な雲が好きなんだよ】

フランス文学と云えば、スタンダール、バルザック、フローベール、モーパッサン、ユゴー、ゾラ、モーリャック、ロマン・ロラン、サルトル、カミュ、マルロー、サガン、クレジオ、あとフランス語で傑作を書いたクンデラと、いくらでもいるけれど、あたしにとってのフランス文学と云えば、同性愛者たちの文学、かもね。

ヴェルレーヌ、ランボー、コクトー、ラディゲ、プルースト、それからジッド、あと、だれだっけ。

それに、フランス文学者と云えば、探偵にとっては獲物。

たとえば、〈サディスト〉サド、「呪われた詩人」ヴィヨン、『泥棒日記』ジュネ。

奇人変人の哲学者、バタイユ、アルトー。

あたしはパリで『三銃士』になりたいけれど、『モンテクリスト伯』になっちゃうかな。

伯爵になるなら、ロートレアモン伯爵。

そのときあたしは美しい。

【解剖台の上でのミシンと雨傘との偶発的な出会いのように】

おお、この『日々の泡』よ。

* * *

郷田は覚え立てのフランス語で、
「A la recherche du temps (失われた時を求めて)」
とつぶやいた。

パリに黄昏が降りて来た。
エッフェル塔の頭部が、霞に覆われ始めた。
シャンゼリゼ大通りの東端に新しく建てられた、高級ホテル、「Meigret (メグレ)」
に戻るために、郷田はおもむろに歩き始めた。
すると、脇の方からフランス語で声をかけられた。
言葉が解らないという仕種をしながら、横を見ると、近衛歩兵の恰好をした若い
男が立っている。

濃紺の制服、円筒帽、手にマズケット銃、腰にサーベル。
まるでナポレオン時代の歩兵である。
観光案内人だろうと、郷田が再び首を振ると、津軽弁に似た妙なフランス語で何
やら話しかけてきた。

郷田は、(パリに関するエッセイを沢山書いている) 森有正の本に、

【パリでは皆なにかを探している】

という一節があったのを思い出し、

(あたしは探されたくないわ)

とそっぽを向いた。

すると今度は、流暢な日本語で話し掛けてくる。

「あなた、日本一の探偵、郷田さんでしょう」

(日本一は麻暮さんだわ)

と思いながらも、悪い気はしない。

「よく解ったわね」

一応そう答えた。

「ウィキペディアで見えています。

ナポレオンに似ているから、すぐに解りましたよ」

歩兵は愛想笑いをした。

「たしかに、アングルが描いたナポレオンには似ている気がするけど、じっさい似
ているのは背が低いところくらいじゃないかしら」

(できれば、ジャンヌ・ダルクに似ていると云ってほしかったけど)

「ご謙遜を。」

郷田さんは、パリでは日本のナポレオンで通っています

ネットで評判なのをご存じないのですか」
「そんなことだれも云ってくれないけど。
歩兵さんの間で通っているだけじゃないの」
郷田は莫迦にされている気がした。
「僕は歩兵さんではありません。
郷田さんに怪しまれないよう、あえてこういう恰好をしてきたのですよ」
(余計に怪しいわ)
とは云わず、郷田は相手の名前を聞いた。
「僕はギャバンです。
信じてもらえないでしょうけど、名優ジャンギャバンは、僕の曾祖父です」
だれも信じそうにないけれども、ギャバン青年は真面目な顔である。
「ジャン・ギャバンには似ていないけど、アラン・ドロンには似ているわね」
「とにかく、ギャバンと呼んでください」
「とにかく、ギャバンと呼ぶわ。
むむむ、危険な香りがするわね」
「シャネルつけてますから、香るんですよ」
「シャネルつけてますか、よけいに怪しいわ」
「それは、ええと、日本語では、そう、濡衣です、冤罪です」
「何も犯罪者と決めつけたわけじゃないわ。
でも、その銃とサーベル、本物でしょう」
「本物だったら、重くて歩けませんよ」
ギャバンはサーベルを抜いた。
どう見ても紙で作られていた。
ギャバンはマスカット銃を空に向けて発射した。
銃口から出てきたのは、フランスと日本の国旗だった。
「でも、どうして、こんな恰好してんのよ」
「フランスの国歌、〈ラ・マルセイエーズ〉は軍歌って、ごぞんじですか。
こういう恰好していると、通行人に蹴っ飛ばされずにすむんです」
「どうせなら、ナポレオンの恰好すればいいのにさ」
「あのね、この国では、ジャンヌ・ダルクとナポレオン・ボナパルトとシャルル・
ドゴールの悪口を云ったり、からかったりすると、殺されかねません」
「ジャンヌ・ダルクもナポレオン・ボナパルトもシャルル・ドゴールも好き。
でも、あたしはさあ、この国は性差別がないから好きなのよん」
「僕は郷田さんが好き。
国交回復、信頼回復、健康回復」
なんてことを云いながら、ギャバンは握手を求めてきた。
郷田は渋々握手をした。
まだ信用してはいなかった。
「それで、あたしに何のご用かしらん」

「日本一の探偵に解決してほしい、迷宮入りの事件があるんです」
ギャバンはためらわずに答えた。

歩きながら話をしていたふたりは、ミラボー橋を渡り、ジャンゼリゼ大通りに向かっていた。

それから自然に二人は地下鉄に乗った。

「スリ注意」のアナウンスが、フランス語、英語、中国語、日本語で繰り返し放送されていた。

「ちなみに、僕はスリではありませんから」

ギャバンが何気なく云った。

郷田は黙って頷いた。

相手がスリであるかないかぐらいは、郷田くらいのベテラン探偵にはだれでも解る。

地下鉄に二駅乗って降りると、ホテル「メグレ」までは、直接エスカレーターで行ける。

郷田はホテルのロビーで続きを聞くことにして、一緒に入口を通るとホテルのボーイに声をかけられた。

正確には解らなかったが、近衛歩兵の恰好ではホテル内には一步も入れないということらしい。

するとギャバン青年は、その場で潔く制服を脱ぎ捨てた。

下は薄汚れた地味なTシャツと短パンだった。

ギャバンは二の腕の筋肉をみせびらかすふうであったが、その筋肉は女を抱きかかえる筋肉ではあっても、女を取り合ってライバルと戦うための筋肉ではないことが、郷田には判ってしらけた。

ボーイは渋面を崩さなかったが、郷田がロビーだけだと指で示すと、渋々頷いた。

郷田は一旦ルームに戻って、ミネラルウォーターとマドレーヌを抱えると、ロビーのソファにふんぞりかえっているギャバンのところに持って来た。

「神様にも見放された僕は、修道院のビスケットが良かったんですが」

なんてことを云いながら、さっそくギャバンはそれらを口にした。

「いまからは、あたしがあんたの神様よ。

飢えたる若者よ、落ち着いたら話してちょうだいね」

郷田は録音用テープをオンにした。

「プルストみたいにはうまく喋れないけれど、聞いてください」

ギャバンの云うところの「迷宮入りの事件」とはこういうものであった。

日本の名古屋からパリに来た二十歳の女子留学生が、セーヌ河岸で忽然と姿を消した。

セーヌ川に身投げしたわけではなく、パリ大学の学生仲間たち（そのうちの一人がギャバンだ）が、最後に目撃したのがそこだったわけである。

スマホは繋がらないし、三日経ってもアパートに戻らなかったため、学生仲間たちが警察に捜索願いを出した。

語学堪能の彼女が単純に道に迷うとか、武芸百般の彼女が簡単に拉致されるとは思いにくい。

パリの警察は、セーヌ川の川底やブローニュの森の奥を中心に探したけれども、手がかりすら発見できなかった。

二週間後に、日本から家族を代表して従姉が来仏したけれども、どういうわけかその従姉も行方不明になってしまった。

パリの警察は再び、セーヌ川の川底やブローニュの森の奥を中心に探したけれども、やはり手がかりすら発見できなかった。

ちなみにこれは七年前の事件で、消えた女子学生がもしも生きていれば二十七歳。彼女の名前は、小金井豊子。

一つ年上の従姉の名前は、山本久子。

（小金井、山本、聞いたことあるわね。

そうだわ、ノンフィクションノベル『死んだる団』に出て来たわ。

たしか〈日刊スクープ〉のスター記者が小金井豊で、編集局長が山本久治。

それに小金井記者は名古屋支局だったはず。

偶然にしては出来過ぎているから、これは必然ね。

パリの警察がもし『死んだる団』を読んでいたら、何か感じるどころがあったかも)

「あのさあ、もしかして、その行方不明事件の後に、テロ事件って起きなかったかしら」

「おや、よくござんじで。

毎年一件で、計七件ありますね」

「決めた、決めたわ」

郷田は叫んだ。

ギャバンは郷田に合わせて口を大きく開けた。

「決めましたか」

「決めたわよ。

これは、あたしの事件よ。

ボランティアだけど、事件が解決したら、ナイトの称号をもらえるはずよ」

「あの、それは、イギリスのまちがいでは」

ギャバンの声は郷田に聴こえない。

「パリがあたしを呼んでいたのは、このためだったのね。

あんたを通訳兼ボディガードとして雇うわ。

日当は日本円で三万円だけど、二十四時間拘束よ」

「じつはその言葉を待っていました」
「どっちの言葉かしら。
事件解決に乗り出す、それとも通訳として雇う」
「どっちも、です」
「パリ警察の担当刑事を知ってるかしら」
「もちろんです。
パリ警察一の敏腕とうたわれたセリーヌ刑事です」
(いくら敏腕でも、相手が【死んだる団】じゃあ、麻暮さんじゃないと無理ね)

二〇三一年、七月三十一日、午前十時。

郷田狂介とギャバン青年は、パリ警察署の近くのカフェ、「アルヌール」で、セリーヌ刑事を待っている。

郷田は昨夜ギャバンに、ブランドものだがシンプルな上下（ホワイトシャツとホワイトスラックス）を買ってあげたので、郷田とギャバンはパリのセレブに見えないこともない。

「朝食だったら、こんな名前だけ素敵なカフェではなくて、〈ティファニーで朝食を〉したいわね」

「あの、それは、ニューヨークですけど」

ギャバンの声は郷田に聴こえない。

ギャバンは、郷田探偵はきっとオードリー・ヘップバーンが好きなんだと思ったが、じつは郷田はチビでホモのトルーマン・カポーティーのファンだったのだ。

ギャバンの紹介で、セリーヌ刑事に会った郷田狂介は、そのハンサムぶりとその渋さと、シャネルの香りに、心ウキウキ胸ドキドキなのである。

こんなことは人生でたったの三回目で、最初は憧れの舟木英介探偵に会ったとき。けれども舟木探偵は極め付けの愛妻家であった。

二回目は尊敬する麻暮正作探偵に会ったとき。

けれども麻暮探偵はすでに鉄仮面で、いまはオカメンだから、素顔は解らず仕舞いである。

三回目の今回は、その面相だけで、完全にいかれてしまった。

なんと云ったらいいのか、ピエール・カルダンとココ・シャネルが結婚したらこんな子供が生まれるにちがいない、そういう面相なのであった。

いずれにしてもセリーヌ刑事は、通訳のギャバンから用件を聞き、郷田の名前と稼業を聞くと、雑務を終わらせてすぐに行くから「アルヌール」で待っていてほしいと、表向き丁重に答えたのだった。

空腹だったギャバンは、カフェオレの大と円盤型のアップルパイを注文し、すこし胃が痛かった郷田はアップルティーとはちみつサブレを注文した。

注文した品が届くと、ギャバンは普通なら四人くらいで食べるアップルパイにかぶりつき、郷田はアップルの香りを感じながら窓外を視た。

まさかパリにまで来て、荒野大三郎の存在を感じるとは思ってもみなかった。郷田は己の甘さと荒野の巨きさに、思わず慄えを覚えた。

それから待つこと十五分、セリーヌ刑事がやってきて、すぐに煙草に火をつけた。改めて自己紹介をした郷田だったが、

「ごうたー探偵、パリで一も有名ー、勇気まんまん、おかまんまん」

口髭を微かに揺らせたセリーヌは、たどたどしい日本語で云った。

郷田はいささか驚いたが、先方のお世辞だと考えることにして、ギャバンの同時通訳でこう伝えた。

「あなたは、パリ警察一の敏腕だって聞いているわ。

それなら、日本人女性二人の行方不明事件が、単純な事件、つまり自殺とか他殺とか、そんなもんじゃないことは、きっと解っているわね。

でも、あなたが解っていない情報を教えるわ。

小金井豊子と、その従姉の山本久子はきっと、日本中を震撼させた、【死んだる団事件】を調べていた新聞記者とその上司の孫たちよ」

さすがにセリーヌは、【死んだる団事件】に鋭く反応した。

郷田は、【死んだる団事件】の概略を、できるだけ簡潔に語った。

セリーヌはしばし思案をしていたが、とつじょ郷田がのけぞるほどに顔を突き出して来て、ギャバンが同時通訳をてこずるほど早口のフランス語を放った。

「つまり、ふんづまり、郷田さんは、豊子っぺと久子っぺは、その【死んだる団】のパリ用メンバーで、毎年パリで起きている糞ったれテロ事件に、何らかの関わりがあると云うんだね。

しかもその糞ったれ黒幕は、日本の【死んだる団事件】と同様に、荒野大三郎という巨大な恐るべきうんこの的存在であると」

郷田が何度も頷くと、セリーヌは今度は身ぶり手ぶりで話し始めた。

そのしゃがれ声は、フランス語だったためか、はじめは渋く感じたのだが、そのうち蛙か獾の声を連想させることになった。

とうぜん郷田は蛙ではないほうを選んだものの、獾の声は残念ながら聴いたことがなかった。

「じつは私も、この失踪事件は、小便ちびるほど単純ではないと考えている。

なぜなら、もしも自殺にしろ他殺にしろ、経験的には偶然の産物なのに、屁ほどの物的手がかりが残されていない。

ということは、もしかするとこれは、あらかじめ用意周到に仕組まれた、糞ったれ事件なのではないかと。

けれども屁ほどの物的手がかりが残されていない以上、この七年間、ほとんどイ

ンポのチンポコ程度しか動きようがなかったというのが、便秘くらい確かななところで。

その【死んだる団】の件を聞いて、いま思い起こしているのは、毎年パリで起きている糞ったれテロ事件、目撃者の話だと、雌豚のテロリストが中心ということで。

日本の【死んだる団事件】でも、雌豚が関わっていたのかな」

いささか遅れがちなギャバンの同時通訳が終わると、郷田はひとりの女性の名前を口にした。

「立花雪絵、さん」

さんづけにしたのは、(もうとっくに亡くなってはいるが) 雪絵は後にノンフィクション・ノベル、【死んだる団】を書いた山内参三の妻になったからである。

「立花雪絵。

美しーい、イクイク死ぬ死ぬ、その名前」

これくらいの日本語ならできるセリーヌは、うっとりとした顔に似合わない、しゃがれ声で云った。

「名前は美しいが、殺人は醜かったのよ。

でもさあ、とても個人的なというか、マニアックな殺人って感じで、すくなくともテロというイメージはないけどね。

でもさあ、【死んだる団】の他のメンバーで、テロリストっていうイメージの男は数名いたわね」

「グエ、グエ」

セリーヌは唸った。

唸り声に通訳はいらない。

そのせいか、余計に蛙の声を連想させた。

「クエ、クエ」

郷田は合わせて、雌蛙になった気分で唸った。

「グエ、グエ」

「クエ、クエ」

「グエ、グエ」

「クエ、クエ」

「グエ、グエ」

「クエ、クエ」

まだまだ続くが、十回目では、お互いさすがに笑い出した。

そして、この笑いは、セリーヌと郷田が、この事件に於いて、いわば「運命共同体」になる默契であった。

さしあたって郷田は、〈日刊スクープ〉や名古屋大学などの日本の情報を集めて、セリーヌに提供することを伝えた。

さしあたってセリーヌは、現在も進めているテロリストのアジト探して、何か情報があったら必ず郷田に連絡すると云った。

二〇三一年、八月七日、午後一時。

ホテル「メグレ」の、クーラーのよく効いた部屋で、郷田狂介はギャバン青年とチェスをしている。

前日郷田は、日本の情報をセリーヌに与えたばかりであった。

それは、小金井豊子と従姉の山本久子は名古屋国際大学の同窓生でもあり、〈イスラム文化研究会〉のメンバーでもあること。

それから、かつて名古屋とパリで沢山の文通をしていた相手が、パリ大学教授のフランコ博士であること。

「郷田さん、そろそろランチを」

とギャバンが云ったとたん、郷田のスマホにセリーヌから電話が入った。

郷田は一旦出てからギャバンに渡して、同時通訳をさせた。

「昨日の郷田さんの情報を元に、十年前からパリ警察のブラックリストに載っている、フランコ博士のルートから、テロリストらしき連中の、アジトらしきものを見つけたので、一緒に行ってみませんか」

「イクイク」

と郷田が答える前に、

「イクイク」

とギャバンが答えた。

「メルシー」

とセリーヌはしゃがれ声で云った。

郷田とギャバンは急いで支度をし、タクシーでパリ警察まで行った。

窓からなにげなく外を視ると、低い空にいくつかの雲があった。

湘南のとりとめのない雲と較べ、パリの雲は輪郭がくっきりして、量感が豊かだった。

その雲のひとつが、オカメンに見えた。

郷田はスマホを取り出し、麻暮正作にメールを送った。

計十六回送ることになる、メールの第一回目だった。

パリ警察署の外に停めた覆面パトカーから出て、セリーヌは強い日射しの下で待っていてくれた。

その「アジトらしきもの」に向かうのは、郷田とギャバンとセリーヌと、もうひとり運転手を兼ねた狙撃手のコテの四人だ。

コテは、セリーヌよりも年上と思われる、ひどく愛想の悪い、ひどく人相の悪いイタリア系の中年男だった。

ギャバンが郷田の耳元で囁くには、コテはかつてセリーヌに捕まったギャングの用心棒で、セリーヌの尽力で配下に入ったとのことだった。

顔に似合わず繊細に運転された車は、ブローニュの森を突っ切ったところで止まった。

「よし、糞の時間」

とセリーヌが日本語で云って、百メートルほど先の一軒の廃墟を指さした。

「蔦のからまるチャペル、にしては陰気臭いわねえ。

あんなところに、人が住んでいるのかしら」

郷田がつぶやくと、セリーヌがギャバンに小声で何やら伝えた。

「ちょっとノートル・ダムのお雰囲気はあるけど、十五年前は、古書専門の図書館だった建物だそうです。

わざわざここに来てまで、そういう本を借りる人が少なくなって。

それはともかくあの廃墟はおそらく、複雑な地下水道に繋がっているとのことですよ」

ギャバンから聞いた郷田は、

「ということは、地下水道で逃げる前に、何とかしないとイケないってことね」

四人が車から降りると、セリーヌがコテに対して、指と目と言葉で指示をした。

コテは狙撃用の最新銃を手に、通路を隔てたマンションの屋上に小走りで向かった。

その慣れた様子は、獲物なしでは済まされそうになかった。

コテが消えると、セリーヌはギャバンに何かを云って、ギャバンが必死の形相でイヤイヤをした。

「どうしたのよ」

郷田が尋ねると、

「僕にまず、中の様子を伺って来てくれと」

ギャバンが小刻みに震えているので、郷田は苦笑して、

「震えてるジャン・ギャバンなんか、映画で観たことないわね。

その役目は、あたしがいいわ。

日本語で、ここはどこあたしはだれ、みたいに喋りながら、入っていくってのはどうかしら」

ギャバンがセリーヌにそれを伝えると、セリーヌは即座に親指を立てた。

初めから郷田に頼むつもりで、ギャバンをからかったのだった。

あるいは郷田に直接頼み辛かったのも、こういうやり方をしたのだった。

こういうときにどういう態度をすればいいのか、数多くの経験上解っている郷田は、微細なためらいも見せずにつかつかと廃墟に入ってしまった。

「すみませーん、どなたかいらっしゃいますか。

あたしは日本からの旅行者ですけど、この建物は見学してもよろしいんでしょう

か」

鼻をひんまげたいくらい、埃と黴の臭いがした。

微かに食べ物の匂いもしたのを、郷田の鼻は嗅ぎ付けた。

「あたしは怪しい者でも、お化けでもありませーん。

もちろんお巡りさんでも、ホームレスでもありませーん。

あたしの正体は、オカマの廃墟研究家、郷田狂介でーす。

ちなみに今の日本では、廃人研究家と並んで廃墟研究家がゴマンとおりまーす。

本当は五百人くらいですが、ゴマンは比喻でーす」

郷田の声が終わる前に、どこからか笑い声がした。

確かなのは、若い女の笑い声でないということだ。

郷田は中へ中へと、暗い方暗い方へと、入って行く。

こういうときに、ためらいは最も危険だ。

「笑い声はすれども、姿は見えず。

あたしの言葉は通じていそうですけど。

もしかして、忍者でもいるんですかー。

ごぞんじないかもしれませんが、廃墟研究家って忍者研究家でもあるんですよー」

そのとき、薄闇のなかから、白い衣裳に包まれた何かが音もなく現われた。

大昔の小説家なら、この何かの登場を十頁にわたって書くにちがいないくらいの、魅惑的な登場ではあった。

ともかくその何かは、郷田には幽鬼的な存在に感じられた。

「げっ、廃墟にお化けじゃ」

思わず言葉が出ると、相手も言葉を出した。

流暢な日本語だった。

「私は怪しい者でも、お化けでもありませーん。

もちろんお巡りさんでも、ホームレスでもありませーん。

私の正体は、廃墟研究家のフランコでーす。

ちなみに今のフランスでは、廃人研究家と並んで廃墟研究家がゴマンとおりまーす。

本当は五百人くらいですが、ゴマンは比喻でーす」

自分の台詞を横取りされた郷田は、呆れつつも、

「フランコ博士ですね」

と強く云った。

「おや、どうして私の名前を」

「現代フランスの有名人、でネット検索すると、大統領の次にフランコ博士のお名前が出てきますから」

郷田はいいかげんなことを云ったが、顔をようやく確認できた相手が頷いたところを見ると、見当はずれではないらしい。

フランコは古代の哲学者の風貌を思わせる、想像通りの人物だった。

ただ郷田は、大物を観るときには、老子のこの言葉を参考にするようにしていて、

はずれたためしはない。

【徳のある君子の顔つきは愚者のようだ】

(してみると、フランコは偉い教授ではあっても、徳のある君子ではなさそうだ)

「そういうことなら、お互い廃墟研究家なんて誤魔化すのはやめましょう。

現代日本の有名人、でネット検索すると、天皇陛下の次に郷田探偵のお名前が出てきますよ。

もちろん、日本の偉大な探偵ベストスリーには、明智小五郎、金田一耕助と並んで、郷田狂介さんのお名前が」

(それはきっと、麻暮正作さんのまちがいだわ)

と郷田は思ったが、そんなことはどうでもよかった。

セリーヌに託された郷田の役目は、いまここにテロリストが潜伏しているかどうかだ。

しかし、自分が探偵だと知られているからには、単刀直入でいくのが手っ取り早いのではないかと考えた。

「唐突な質問かもしれませんが、フランコ博士は、パリを狙うテロリストグループの黒幕だって噂がありますわね。

あたしはそんな単純な噂を信じてはいませんが、火のない所には煙が出ないって云いますから」

「それが郷田さん。

私は六十年生きてきましたが、火がないのに煙だけ立ったことって、いくつも経験してきました。

また、火があるのに、煙がちっとも出ないってことも。

もしもお望みなら、具体的な事実をいくつかご紹介しても結構ですがね」

「いえいえ折角ですが、あたしもそれなりの目的があつてここに居ますから」

「目的と云いますと」

「まあ、偶然の旅行者の偶然の目的ですけど。

あたしはこういう稼業してるせいか、胡散臭い年寄りに洗脳される若い女の子を、いっぱい見てきたのね。

それってさあ、あたしみたいな常識人には、我慢ならないのよん」

「ほう、そうですか。

私はその反対でしてね。

こういう仕事を長くやっていると、若い女性を洗脳できる年輩の男性が、実に頼もしく思われましてね。

私も若い学生に教える立場として、洗脳できるくらいの雄弁家になりたいと。

それで、英語、ドイツ語、イタリア語、日本語、中国語と勉強してきましたが、語学力と雄弁力、あるいは洗脳力は、まったく似て非なるものだと、ようやく解っ

てきた次第です」

フランコの身ぶり手ぶりは、至極優雅なもので、郷田も惹き込まれそうになった。

「まあ、そういうものですか」

と一応は云ったが、

(フランコ博士は語学力と雄弁力と洗脳力の、

〈教祖三種の神器〉

を持っている)

と郷田は思わざるを得ない。

「まあ、そういうものです」

フランコは鸚鵡返しに云った。

郷田はもはや待てなかった。

理屈の応酬をいくらやっても勝ち目はない。

「ともかくあなた、フランコ博士は、長年研鑽し学んできた博識と見識とプラスαを、女子学生のテロリスト化に注いだわけね」

フランコの表情が明らかに変わった。

その変化は、郷田の台詞のせいで起きたものだが、郷田の後ろにいるはずの警察権力に対する怒りのほうが、郷田には強く感じられた。

フランコはポケットからピストルを取り出すと、その銃口を郷田の心臓に向けた。

郷田が入口のほうに後ずさりすると、フランコは無言で追い詰めてきた。

それでも撃つ気配は感じられず、当面は郷田を追い払えばいいという感じだった。

外光がフランコの軀を差すと同時に、コテの放った一撃でフランコは倒れた。

郷田がフランコに駆け寄るより早く、奥から戦闘服姿の者たちが現われ、瞬く間にフランコの軀を闇の中へ運び去った。

戦闘服はおそらく五人いたが、そのなかにたしかに女性が二人いたのを、郷田は見逃さなかった。

セリーヌとギャバン、遅れてコテが郷田の所に駆けて来た。

「大丈夫ですか、郷田さん」

ギャバンが日本語で叫ぶ。

「怪我はないか、郷田さん」

おかま掘られなかったか、郷田さん」

セリーヌがフランス語と日本語を混ぜて云う。

「駄目じゃないの、撃ったりしちゃ」

郷田はすごい剣幕である。

セリーヌとコテは顔を見合わせる。

「撃たなければ、郷田さん、おかま掘られてた」

セリーヌは首をすくめる。

「あたしをみくびらないでよ」

フランコ博士一人くらいなら、いつだって捕まえられたのよ。

余計なこととして。
報復テロがあっても知らないから」
セリーヌはギャバンを真ん中に挟んで、
「報復テロを恐れているのは、糞ったれテロリストに対抗することはできない。
我々の目指しているところは、糞ったれテロリストの逮捕ではなく、糞ったれテロリストを七網打尽にすること」
郷田はギャバンを睨みながら、
「七網打尽じゃなく、一網打尽でしょ。
それに、テロリストにいちいち糞ったれつけるの、臭い台詞ね」
ギャバンが首をすくめると、こんどはセリーヌを睨みながら、
「あたしの睨みなんか効かないでしょうけど。
テロリストはどんだけ殺しても、またどんだけ生まれてくるか。
根本的な所を考えないと、殺しあいの連鎖になるだけよ」
「根本的って、どういう意味。
もしかして、男根のこと」
「本質的って意味よ」
「根本だろうと、本質だろうと、何だろうと、もともとそこに憎悪と殺意があるわけなんだから、そんな目屎鼻糞を考えても仕方がない。
我々が考えなければならないのは、目の前の敵を踏んづけることで、目の前のうんこを理解することではない」
「敵かどうか、どうやって決めるの。
例えば、宇宙人が攻めて来たら、地球人はみんな味方でしょ」
「それは、瀕尿的な考え。
宇宙人が攻めて来たとしても、その迎え撃ちの方法の違いで、地球人は殺しあう」
「そんな発想だから、殺しあいが好きになるのね。
人類愛ってものはないのかしら」
郷田とセリーヌの口論の間に、コテは何やら動き回っていた。
郷田はフランコの血液の採取と生死の確認をやっているのかと思ったが、じっさいそういうこともやっていたが、第一目的は廃墟のポイントポイントに爆薬を仕掛けることであった。
「郷田さんの云う通り、もし宇宙人も人類だとしたら。
隠毛並の人類愛で地球は壊滅する」
(老子を思い出したせいか、話を大きくしすぎたわ)
方向転換を考えた郷田は、さらに強く云った。
「ともかくさ、あなたに、一介の刑事に、フランコ博士を亡き者にする権利なんかないわ」
セリーヌは苦笑して、
「ギャバンが郷田さんに、小便ちびるほども説明していない。
私は一介の刑事ではなく、いいえ一介の刑事であると共に、パリ防衛隊の隊長な

んだ」

「パリ防衛隊って、なーに」

セリーヌはそれには答えず、

「郷田さん、車に戻らないと。

あと三分で、あの巨大便所が爆発する」

セリーヌが走り出し、コテもギャバンも走ったので、郷田も走った。

そして三分経ったが、爆発は起きなかった。

セリーヌと目を見合わせたコテが、足早に廃墟に戻る。

その途端、猛烈な爆音が起こり、瞬時に廃墟は崩壊した。

セリーヌがコアの名を呼びながら駆け寄ったが、爆煙がひどく、それ以上は近寄れなかった。

二〇三一年、八月十二日、正午。

ホテル「メグレ」の部屋で、郷田とギャバンとセリーヌは顔を見合わせている。

部屋の中も窓外も明るいが、三人の表情は暗い。

郷田はあれ以来、パリの町が、

〈死都〉

に見えて仕方がない。

テロに対する恐怖がパリっ子の数百倍も感じられ、ちょっとでもパリの町に出ると、じっさいテロの幻覚を見てしまう。

だからなるべく、ホテルの部屋で静かにしている毎日なのである。

それでも郷田は、外界で何が起こっているかが解ってしまう。

そして老子の言葉をまた思い出してしまう。

【部屋から出ていかなくとも世の中のことは解り、窓から外を見なくとも天の理法は見てとれる】

ギャバンは自分のパスポートをいじってばかりいる。

なぜならギャバンは、三日後には日本に帰る、と云い出した郷田に付いて行きたいのだが、まだ郷田の許可を得ていない。

郷田としては、あくまでも気紛れで、もしくは発作的に云い出したものなので、ギャバンの本気度に戸惑っているのだ。

すでにこの部屋に五回もやって来ているセリーヌは、いつもなら遠慮なく煙草をふかすのだが、今日は手にした煙草を何度か口辺に持って行き、その都度諦めたふうに戻す。

二人の様子をしばらく無言で眺めていた郷田は、ようやくセリーヌの云った言葉を繰り返す。

「結局コテの遺体は、爆破された廃墟の中から見つからなかったというわけね。

それでも肉片が採取されて、DNA鑑定の結果コテのものだったというわけね。

つまりコテが死んだという事実は、認めるしかないというわけね」

「うん、こ」

とセリーヌは日本語で云った。

「でもさあ、あたしはね、日本で麻暮正作とか荒野大三郎という不死身の人間を見つけてきたわけよ。

そんなあたしとしては、コテが木っ端微塵になったなんてこと、どうしても信じられないのよ」

「だがもしコテが生きていたのなら、私に一報が来るはず。

そういう屁器、いや機器を身に付けてもいる」

「セリーヌさんはそんな単純な発想をする刑事ではないでしょうが、部下のコテのことだからあえて単純にしてしまうのね。

あたしはさあ、三日前のパリ空港の爆破事件も、警察ではイタズラに過ぎないなんて発表したけど、連中のしわざだと睨んでいるの。

つまりさあ、三日後の本格的な爆破事件の予行演習ってわけ。

それはパリ空港かどこかは解らないけどね。

あれにさあ、コテがからんでいる気がしてならないのよ。

なぜって、あれは、ちっぽけな爆破物を、遠距離から銃で撃ったもんじゃないかって睨んでいるの。

だれもが、あんな腕、持ってるわけないでしょ」

ギャバンの通訳が終わらないうちに、セリーヌは血相変えてまくしたてる。

「ごごご、郷田さんは、もしかしてコテが、屁テロの一味に加わったと云うのか。

へへへ、屁理屈が、ききき、金筋が通らない。

探偵というものは、こういう垂れ流しの無責任発言をするから困る」

ギャバンの通訳はいささか誤訳の、もしくは忖度のきらいはあるが、意味内容は誤ってはいない。

「コテはさあ、ギャングの親分の用心棒だったんでしょ。

そんなら反体制、反社会の感覚が染み込んでいるわけよね。

理屈や筋で、人間の進退が決まるもんじゃないわ」

郷田の推理は想像の域を越えなかったが、それでも郷田は自分の想像を信じていた。

「それなら、郷田さんの予想通りになるかどうか、高みの見物、茂みの開陳といきますか。

三日後が楽しみ」

郷田は呆れ顔で、

「高みの見物より、警備を嚴重にしたほうがいいんじゃないの。

セリーヌさんはパリ防衛隊の隊長さんなんですよ」
セリーヌは郷田の表情をしばらく眺めていたが、何を感じたのか、
「うん、こ」
と云って部屋を飛び出した。

二〇三一年、八月十五日、正午。

郷田とギャバンは、「メグレ」の部屋でランチをとっている。
郷田は、日本から持ってきた「演歌全集」のCDを、ずっとギャバンに聴かせている。
日本に行きたい、日本をもっと知りたいというギャバンに、説明する余裕がないので、演歌を聴けば日本が解るというつもりで聴かせているのだ。
美空ひばり、都はるみ、石川さゆり、藤圭子。
三橋美智也、三波春夫、村田英雄、北島三郎、五木ひろし、森進一。
しかし郷田としては、
「三日後にテロ事件が起こる」
と予告した手前、帰国するどころの話ではない。
その三日後とやらは今日なのだから。
ギャバンももう、パスポートをちらつかせるのはやめた。
ギャバンはオムレツにグリーンサラダにアイスコーヒー、郷田はフランスパンにアップルティー。
外出していないふたりは、あまり食欲がない。
ギャバンがそれとなく云う。
「郷田さんの話のなかによく出てくる、麻暮正作という探偵はどんな人なんですか」
郷田もそれとなく答える。
「そうねえ、探偵と云っても探偵の枠を越えた人ね。
そうねえ、あたしとセリーヌとコテを足したような人よ。
足して三で割るんじゃないくて、足したまんまの人」
「それは凄いいいか恐ろしいですね」
「とても恐ろしいけど、あたしには限りなく優しいわ」
郷田は麻暮の〈オカメン〉を思い出して、微かに笑った。
その笑いを、ギャバンは見逃さなかった。
「ねえ、そろそろ散歩でもしませんか。
外の風を浴びないと、蒸し焼きになっちゃいそうで」
オムレツを頬張りながらギャバンが云った。
郷田はいまだに自分の想像を信じていたが、反面想像がはずれることを願って

それで、アップルティーのコップを置いて、
「そうね」
とひとこと答えた。
ギャバンが身体を揺らせて喜んだ。
「でも、昼間は危険だし、それ以前に暑いから、夕方になってからですね」
ギャバンが郷田の顔色を窺いながら云った。
郷田は黙って頷いた。

二〇三一年、八月十五日、午後五時。

郷田はギャバンと共に、キャリーバッグをひっくり返して、変装の準備をしている。

「ギャバン君、もう兵隊の恰好は駄目よ。
テロリストに真っ先に狙われるからね」
「それなら、どんな恰好にしましょうか」
郷田は変装用具をひっかけ廻して、
「昔昔、老子という正体不明の偉人がね、こう云っているの。」

【形の無いものが隙間の無い所に入っていく】

つまりさ、あたしたちは無形文化財にならないといけないの」
「よく解りませんが、具体的にはどんな恰好をすればいいんでしょう。
学生、紳士、女装、それとも、ならず者、酔っ払い、浮浪者、ボヘミアン」
「それぞれ、その最後のやつでいきましょ」
「ボヘミアン、ですか」
「そうそう、しかもちっとも目立たないボヘミアン。
いつも世間の隅っこを歩んでいる、日陰者。
いつも『座頭市』が云っていた、お天道様の下で大手を振って歩ける者の反対ね」
「ざとういちって、何ですか」
「知らないのは若者の特権ね。
ともかくはやくボヘミアンの恰好をして、非常口から出ましようよ」
「ちよっぴり時代錯誤じゃないですかね」
「莫迦ね。
時代錯誤が時代先取りの時代が来ているのよ」
郷田は自信満々に云ったが、確然たる根拠はなかった。

探偵七つ道具が入った袋を担いだ郷田と、一晩分の食べ物と飲み物が入った袋を

抱えたギャバン、つまり二人のボヘミアンは、目立たないように隅っこをうろつきながら、それでも目と耳と鼻は、どんな光でもどんな音でもどんな臭いでも逃さないつもりで、セーヌ川沿いに進んでいった。

「ギャバン君、パリの町って、こんなに騒々しかったかしら」

黄昏時に関わらず妙な活気を感じ、郷田がつぶやいた。

「今夜はフェスタ、要するに記念祭ですから、これから益々騒々しくなりますよ。花火も打ち上げられます」

「何の記念なのよ」

「云いにくいですが、日本の敗戦が決まった記念日」

「げげっ、そんなもの聞いたことないわ」

「表向きは花火大会ってことで、日本には内緒でやっています」

「へえ、日本が負けたことがそんなに嬉しいの」

「だって、日本は憎むべきナチスドイツの同盟国ですから」

「でもさ、自分が兵隊になって日本と直接戦った人って、どんだけいるのよ。

それに、そんな昔のこと、知っている人って、どんだけいるのよ」

「そういうことではありません。

つまり、愛憎とか、好き嫌いとか、復讐心とか、あるいは、加虐とか被虐とか、もしかすると差別感とか、そういうもののDNAってものがあるんです」

「なるほどねえ」

一応納得した郷田は、ギャバンの話の最中でも、
(あたしがテロリストだったら)

と考えていた。

エッフェル塔を見上げ、

「あそこに上ろうかしら。

パリが一望できるでしょ」

「こんな恰好では、おそらく受付で×ですよ」

「それもそうね。

つい自分がボヘミアンだってこと、忘れていたわ。

それにしても、お祭り時はテロリストの狙い時だわねえ」

「僕は、郷田さんが、今夜のフェスタを知っていて、三日後と云ったのかと思っていました」

「あたしは偶然の旅行者。

だからこれも偶然」

「偶然というものは、どこか必然っぽいですね」

「ギャバン君がもしテロリストだとしたら、どこを狙うかな」

「ミラボー橋ですね。

今回の花火見物には、一番いい場所ですから」

ギャバンの言葉に、郷田はミラボー橋に向かうことにした。

そろそろ花火が打ち上がる時間になって、ミラボー橋には人々がひしめいていた。半分くらいは外国人観光客で、このなかにテロリストがまじっていても簡単には判明しないだろう、と郷田は察知した。

「ギャバン君、橋の下には行けるの」

郷田が聞くと、

「ふだんは行けないことはないですが、いまは禁止区域になっていますね」

「禁止区域かあ。」

「あたしは行ってみたいんだけどさ」

「僕らはボヘミアンですから、もしかすると誰も止めないかもしれませんが。」

それに現在、パトロールは橋の上に限られていますから」

ギャバンの声が終わらぬうちに、郷田は橋の端から流れの方へ降りて行った。

ギャバンが続いた。

花火客も警備員も文句をつける者はいなかった。

警備員を仕切っているのはセリーヌであったが、郷田の妙な動きを見ていて黙認していた。

「おっ」

とギャバンが小さく叫ぶのと同時に、最初の花火が打ち上がった。

夜空は完全な闇ではなかったが、鮮やかな円が舞った。

次の花火もその次の花火も、次々にあがり、続けて観客の歓声。

いったん花火が消えると、闇が濃くなった。

ほんのしばしの闇の間を置いて、次の花火が上がった。

ギャバンはそちらに見とれていたが、郷田は盛んに橋の底と根元に、高性能懐中電灯を当てていた。

「ギャバン君、ここからあそこにこの電灯をずっと当てておいてね」

郷田は懐中電灯をギャバンに手渡すと、ギャバンが光を当てている箇所を目指して、吸着手袋と足袋を着けると、ヤモリの恰好で鉄橋のアーチの底を辿り始めた。

セーヌ川の水が妙にどす黒く見え、郷田はモーパッサンの『水の上』という短編の一節(セーヌ川べりで暮らすボート狂の眩き)を、思わず思い浮かべてしまった。

【猟師にとって川は神秘的で、深々として、得体の知れないものだ。幻想と夢幻の国だ。夜になると存在しないものが見えたり、見知らぬ物音が聞こえてきたりして、まるで墓地を横切る時のように理由もなく身震いしてしまう。実際、川は墓地の中で最も薄気味悪い墓地だね。墓石がない墓地なのだから】

「郷田さーん、気をつけてくださーい。」

「落ちると死にますよ」

ギャバンが叫んでいる。

(落ちなかったってこのままでは死ぬわよ)

郷田には確信があった。

目のいい郷田に確然と映っていたのは、最新型の時限爆弾で、郷田はそれを見たことがあった。

郷田が時限爆弾が取り付けられた箇所まで辿り着くのに、花火七発というそう長い時間ではなかったが、制限時間はすでに一分もなかった。

導線を切る時間のないのを覚った郷田は、時限爆弾を強引に引き剥がすと、それをセーヌ川のなるべく真ん中まで精一杯放り投げた。

時限爆弾は川の上層部分で大爆発を起こし、川の水柱は十メートル近くあがった。

それも今夜のイベントのひとつと勘違いした花火客は、花火が上がる時以上の大歓声を上げた。

息を切らした郷田が下へ降りて、ペットボトルの炭酸水を飲んでいると、セリーヌが近くまで駆け寄って来た。

「郷田さん、メルシー。

それにしてもよく解ったね。

何かテロの屁垂れ情報でも入ったの」

あの爆発が何であるか解っているセリーヌが、勢い込んで聞いた。

「事件を未然に防ぐことも、じつは探偵の仕事のひとつなのよ。

金田一耕助なんかはそれが苦手だけど、あたしは得意なのよん。

警察には情報が入っても、探偵には情報なんか滅多に入らないの。

だからいつも、触覚をのぼし、嗅覚をはたらかせ、視覚は死角までも視ようとしているわけ」

郷田の自画自賛に、セリーヌは感心するよりも呆れた表情だったが、郷田と共に動いたギャバンは、ひたすら興奮し、益々郷田を尊敬の目で見るとばかりであった。

二〇三一年、八月十六日、午前六時。

郷田狂介はギャバンと共に、帰国の準備をしている。

麻暮正作にもメールを送った。

この早朝、フランス各紙の第一面は、

〈現代のナポレオンは日本一の探偵〉

〈テロからパリを救ったのは日本のオカマだ〉

〈郷田探偵に乾杯／フランスは日本に大きな借りを作った〉

セリーヌ刑事の、郷田探偵を紹介する談話を載せる新聞もあった。

セリーヌは、かつてパリ警視庁の付属施設であった〈morgue/モルグ（死体公示所）〉の話をしながら、日本一の探偵である、郷田狂介というオカマさんの溺死体を、つぶさに観賞してみたかったパリジェンヌは五万といただろうと、不謹慎なこ

とまで口にしていた。

パリ中の大騒ぎに、ギャバンは大騒ぎして喜んだが、郷田は浮かれてはいられなかった。

なぜならネットでは、郷田を讃える膨大なツイッターに混じって、テロリスト軍団、

「Z（ゼット）」

の犯行声明文及び、

「次の標的は東京だ」

とのメッセージが載っていたからである。

郷田はセリーヌと密談をし、その結果、共に日本で「Z」退治をする約束をした。

もちろん、セリーヌはコテのことがあり、複雑な心境でもあったし、立場上臆しているところもあった。

郷田とギャバンが励まし鼓舞したので、セリーヌは腰をあげることになった。

決め手になったのは、

「本当の日本一の探偵、麻暮正作さんに会えるわよ」

という、郷田の優しい言葉と、

「Zが日本に行くのなら、パリに於いてはセリーヌ刑事の出番がないでしょう」

という、ギャバンの嫌味な言葉だった。

むしろ私立探偵ではないセリーヌは、郷田とちがって身軽ではない。

警察署内の調整終えて、一週間後に出発となった。

パリ国際空港まで見送りに来たセリーヌは、郷田を力強くハグして、「郷田さんは、屁垂れの私が、おならを我慢しなきゃならない、サイコーに尊敬できる日本人」

と云った。

郷田は、いささか冷笑して、

「一ヶ月後にはその台詞を、別の日本人にしているわよ」

と応えた。

二〇三一年、八月十七日、正午。

麻子を胸の前に抱えた麻暮正作は、成田空港の到着ロビーに居る。

オカメンをだれも訝しく思わないのは。パパがお面をかぶって赤ちゃんをあやしていると勘違いしているからだ。

麻子は、あやすのが不要なほどおとなしい。

郷田狂介の乗ったJALは一時間遅れで到着し、郷田はギャバンを引き連れて帰

って来た。

葉書でもメールでもギャバンのことを聞いていなかった麻暮は、てっきり郷田の愛人かと思って声をかけそびれた。

郷田のほうで気づき、麻暮に抱きつくと、ギャバンに向かって、

「ギャバン君、この人が麻暮正作探偵よ」

と紹介した。

ギャバンは想像だにできなかった麻暮の風体に、さすがに驚きを隠し切れなかったが、やはりオカメンは赤ちゃんをあやすためのお面と思ったし、驚き以上に感動が勝っていた。

「おー、そうですか。」

日本一の探偵、麻暮正作さんが、あなたなのですね。

やっぱり、どこの国でも一番の人はどこか普通じゃないですね。

郷田さんは、パリにいる間中、麻暮さんのことばかり云っていましたよ。

僕は、パリで郷田さんの通訳をしていましたが、あらためて子分にしてもらった、みなしごギャバンです。

僕は、もちやき、いいえ、やきもち、いっぱいでした」

「君、君、それは初めて聞いたわよ」

郷田は声をあげた。

「やきもち、ですか」

「ううん、みなしご」

「それは、またまた、いいえ、たまたま、です」

「みなしごと知っていたら、もっと優しくするんだったわ」

「郷田さんは、わざわざ優しくしなくっても、もともと優しい人ですから」

「相変わらずお世辞だけはうまいのよね」

ふたりの会話を微笑んで聞いていた麻暮は、

「郷田さんのBMWで来たから、とりあえず駐車場に行きますかね。」

それとも何か食べますか」

「日本食に飢えているから、というよりも、ギャバンが日本のラーメンを食べたいって云うから、まずはラーメン屋ね」

「ケケ、そんなら、階下に中華料理の老舗があるよ」

「そういうんじゃないくて、福しんとか日高とか、あるいは喜多方とか佐野のラーメンがいいわよね」

「ケケ、そんなら、昭和風ドライブインはどうかな」

「そんなのあるの。」

いまはみんな道の駅でしょうよ」

「それが、レトロ復活というわけさ」

「それよそれ、チャーシュー一枚とナルト一枚とノリ一枚とシナチク三本しかのってない、あのシンプルな昭和の醤油ラーメンがいいわね」

どうやら郷田は、自分が食べたい風であった。

「たしかに外国には、寿司屋も天麩羅屋もあるね。
味噌汁も納豆も梅干も売っている。
ラーメン屋もあるけど、ボクが食べたかぎりでは、寿司や天麩羅は日本に遜色はないけど、ラーメンだけはインスタントラーメンみたいだったな」
「みたいじゃなくてさ、あれインスタントラーメンよ。
厨房で作っているの垣間見たもの」
「郷田さん、それは作り方の問題でね。
ケケ、厨房に入って、作り方教えてあげれば、インスタントラーメンも莫迦にはできませんよ」
「むむむ、麻暮さんとしては、そうきたか。
あたしはさあ、お節介が嫌いなのよね」
「節という言葉がいかんのよ。
節酒、節煙、節約、節電、節制」
「麻暮さんたらー、こんなところでお喋りはやめましょ」
「すまんすまん、なかなかお土産が出て来ないので、つつい」
「それがさあ、あたしとしたことが。
ギャバン君の他に、お荷物は沢山と思い込んでいたもので」
「ケケケ、冗談ですよ。
緊急帰国にお土産なんか期待はしませんよ」
「一週間後にパリ警察のセリーヌという刑事が来日するわ。
きっと、マドレーヌをダンボール一箱」
「ケケケ、それはビッグニュースですね。
つまり、パリのテロ組織が日本に」
「そうなんだけど、ちょっと厄介でさあ。
麻暮さんも無関係ではないから、あとで家に帰ったらしっかり報告するわ」
「おやおや、麻子とのんびり暮らすつもりが」
「麻暮さんらしくもないわね。
荒野大人はまだ健在よ。
きともういまごろは、パリのテロ組織は、荒野大人と接触を計っているわね」
「ケケ、ボクもボクらしくならないといけませんな」

巨人荒野 第二部／第二章／第四項

自他ともにうらみかこつ心なし
宮本武蔵

老人の物まね この道の奥儀なり
世阿弥

夏来てもただひとつ葉の一葉かな
芭蕉

叩かれて昼の蚊を吐く木魚かな
夏目漱石

いまぞゆく雨ふりやまずいまぞゆく
禿光山人

二〇三一年、八月二十五日、正午。

郷田狂介とギャバンは、成田空港ロビーで待ちくたびれている。
予定の飛行機は二時間遅れで到着した。

パリ警察の刑事セリーヌは二人の顔を見るなり、
「ブラボー」
と叫んだ。

ダンボール一箱のマドレーヌはなかったが、ミラボー橋のミニチュア（日本円に
して千円くらい）をお土産に持参していた。

「フランス人はケチですから」

お土産は期待しないほうがいいとギャバンに云われていた郷田だったが、失望の
色はありありだった。

見かねたギャバンが、

「これはブラボー橋ですね」

と冗談を云うと、

「郷田さんの、ミラボー橋の、活躍の、あの、お礼」

とセリーヌは日本語で云って、それから、フランス語でまくしたてた。

「意味がわかんないわよ」

郷田が聞くと、ギャバンが通訳して、

「簡単に云いますと、無差別セックスみたいな、無茶な真似はどうかもうやめてく
ださい、と」

郷田は苦笑して、身ぶり手ぶりで主張する。

「セリーヌさんは刑事、あたしは探偵。

あなたがあたしでも、同じことしてたわよ」

セリーヌは首を竦めて、
「郷田さんには、尻を向けて寝られません」
と云ってから、郷田にハグをした。
「あらま、いい香り。
シャネルの五番かしら」
郷田はうっとりしたが、セリーヌは慌てて否定し、
「今日はプアゾン」
「なるほど、毒をもって毒を制するわけね」
身体を放した郷田は云って、その日本語が解らないセリーヌに、意味を伝えるようギャバンに頼んだ。
ギャバンも解らないと首をふるので、諦めた郷田は、セリーヌを愛車のところまで案内すべく歩き出した。

二〇三一年、八月二十五日、午後五時。

郷田は愛車を運転している。
助手席にギャバン、後部座席にセリーヌ。
「スカイツリーかレインボーブリッジを見せましょか」
と郷田は聞いてみたが、案の定セリーヌは、
「乱交パーティーやりに来たのではない」
と云うので、途中で寿司をごちそうし、自邸に直行した。
麻子を抱いて外まで出迎えていた麻暮正作のオカメンを見て、セリーヌは一瞬のけぞった。
「あの人が伝説的な探偵と云われている、麻暮正作さんよ」
と郷田に説明されても、事情がのみこめなかった。
郷田は正直に、麻暮の顔のことを伝えと、
「さすがに日本の美容整形は世界一」
郷田はいささかためらってから、
「あのオカメンの下は、そういうレベルじゃないみたいよ」
車から降りると、セリーヌは麻暮に握手を求めて、
「世界一の探偵にお会いできて光栄です」
すると、郷田からメールであれこれ伝えられていた麻暮も、
「世界一の刑事にお会いできて光栄です」
と返した。
お世辞を交わしただけで、二人は意気投合した。
「紅茶とマドレーヌの用意ができていますよ」
みんなに麻暮は伝えて、先に邸内へ入って行った。

二〇三一年、八月二十五日、午後六時。

セリーヌは郷田邸の居間でくつろいでいる。

ギャバンが何かと気をつかっている。

ひとしきり雑談めいた話があった後、麻暮が二階で麻子を寝つかせた後、誰ともなく今後の対策の検討に移ろうということになった。

議長役は郷田が買って出るほかはない。

「麻暮さんにはメールで報告したけど、改めて整理するとさあ。

小金井豊さんの孫娘である小金井豊子、山本久治さんの孫娘である山本久子、イスラム研究家のフランコ教授、それとあたしの勘では、セリーヌさんの配下だった狙撃名人のコテ。

このZ（ゼット）四人組が、いつ動き出すか、なにを仕出かすか、ということよね」

「そういうことだが、動き出す前、仕出かす前に手を打つのか。

それとも、動き出してから、仕出かしてから手を打つのか、ということだね」

麻暮が云うと、セリーヌは一本立てた指を左右に振って、

「刑事の立場としては、事件が起きてからでないとい何もできない。

うんこする前に、うんこの臭いは嗅げない」

その言葉を予想していた麻暮は、すぐに応じる。

「類は類を呼ぶ、というか、郷に入れば郷に従え、というか。

連中が、日本に来て、何かを仕出かすとしたなら、まずは、日本で最大最悪の危険人物に接近するにちがいないね。

しかも、たっぷりと軍資金を出せる人物。

そう、ボクは、それは荒野、いや西園寺金時のほかにはいないと睨んでいる。

ケケッ。

もしかすると、穿った見方かもしれないが、連中を日本に呼び寄せたのは、西園寺金時なのかもしれないよ」

麻暮の推理に、唸りつつ郷田は腕を組んだ。

「さすがは麻暮さん、そう読みましたか。

いままで、そんな発想はまったくなかったけれど、麻暮さんに云われてみれば、あたしも何かそんな気がしてきたわ」

「すると、その金時さんを見張っていれば、〈Z〉の動きも解るかもしれないと」

ギャバンが興奮した声で云って、セリーヌに通訳した。

セリーヌは自慢の口髭をいじりながら、

「麻暮さんと郷田さんがそう云うなら、脱糞も反対もできないが、四人組という云い方には賛成しかねるね」

ある程度フランス語が解る郷田は、すぐに、
「セリーヌさんの気持はわかるけど、吉か凶か、遠からずはっきりするわよ」
と誰にともなくつぶやいた。

二〇三一年、八月二十七日、正午。

郷田はキッチンで昼食の支度を始めている。
セリーヌとギャバンはテレビを観ている。
麻暮は麻子を抱いて、庭を散歩している。
テレビでは昼のニュースが始まり、その冒頭で銀行強盗の事件が流された。
セリーヌとギャバンは画面に吸い付けられた。
本日午前十時、今年合併したばかりの、三菱銀行大手町支店に、四人組の強盗が押し入ったとのこと。
四人組は顔を覆面で隠しているが、男性二人と女性二人で、いずれもフランス語と日本語を使っていたと云う。
「おいでなさったわね」
セリーヌとギャバンより先に、キッチンでテレビのアナウンサーの声を聴いていた郷田が反応した。
「やっぱり、郷田さんの云うとおり四人組でしたね」
ギャバンはそう云った後、セリーヌに銀行強盗の手口をフランス語で説明した。
「けれども不思議だな。
銀行に押し入って、金を取らないなんて。
便所に入って、マスかかないようなもんだ。
しかも〈Z〉ならネットで、犯行声明してくるはず」
セリーヌがつぶやくと、郷田は調理の手を休めて、
「西園寺金時がバックにいる証拠じゃあないの。
金時がバックにいて、軍資金が必要とは思われないもの」
「それなら、どうして銀行強盗なんて」
ギャバンの云い分はもっともだと、セリーヌはうなずいた。
「その発想はもっともだけどさ。
あたしは、いずれ連中は、カムフラージュをやってくると思っていたわ」
「と云うことは、つまりその」
「四人組の結束を固めるための行為でもあり、また警察の注意を銀行に向けさせるやり口ね。
つまりさあ、都心の警察の大半が、大手銀行警備に赴けば、他がお留守になるって寸法。
多少悪知恵の働く、テロリストが考えそうなことだわ。

こういうことってさ、刑事には解らなくても、探偵には解るのよね」
郷田はキッチンから居間のテーブルに作り立てのサンドイッチと入れたてのコーヒーを運んだ。

セリーヌは画面を注視していたが、防犯カメラの映像が映ると、
「コテ、あれはコテだ。

他の三人はともかく、コテの癖は、鼻糞を掘る手付きまで見抜いている」
「ここまでは、想定通りね。

次は〈Z〉のターゲットを想定すること。

おそらく今回は、ネットで予告も犯行声明も、してこないでしょうから、あたしらの作戦はひとつ。

それは、麻暮さんに推理してもらうことよ」

そのとき、麻暮が散歩から戻ってきた。

「ケケケ、騒々しさが庭にまで響いてきたよ。

麻子が眠りそうだから、二階で寝かせつかせてから、降りてくるね」

二〇三一年、八月二十七日、午後一時。

郷田、麻暮、セリーヌ、ギャバンの四人は昼食を済ませて、コーヒーのおかわりを飲んでいる。

「あちらも四人組、こちらも四人組。

あちらが〈Z〉なら、こちらは〈G〉。

おそるるに足らんね」

麻暮が云って、宙を睨んだ。

「〈G〉って、何ですか。

プロ野球のジャイアンツのことですか」

ギャバンが聞くと、

「いや、チーム・郷田ってことさ」

郷田はすぐに反応して、

「そんな責任いやーよ。

チーム・ギャバンでいいわ」

今度はギャバンが、

「僕はそんな器じゃありません。

チーム・grande dame はどうかしら」

郷田は怒って、

「意味がわかんないじゃん」

「フランス語で、貴婦人」

「あら、あたしのことかしらん。

悪い気分じゃないけど、結局、責任者じゃないの」
「なら、チーム・虞美人」
「また、あたしのことね。
お世辞なんかもう沢山。
それよりさ、ねえ早く、麻暮さんの見解を聞かせてよん」
癩癩を起こしたふりをして郷田が叫ぶと、セリーヌがすぐに頷いた。
麻暮は、いつもの沈思黙考の仕種をした。
つまり、腕を組んで宙を睨んだ。

麻暮は、おもむろに口を開く。
「今年合併したばかりの、三菱銀行大手町支点を襲ったということは、あくまでも話題性を狙ったんですね。
また日本の警察の注意を銀行に向けるやり口ですね。
つまり、都心の警察の大半が大手銀行警備に赴けば、他がお留守になるって寸法です。
そして、大規模なテロを敢行する」
さっき郷田がセリーヌとギャバンに解説したことと同じことだったので、
「まるで盗聴してたみたいね」
と郷田は云った。
麻暮は無視して続ける。
「それなら、次の狙い、本当のターゲットは何かと云うと、東京オリンピックも大阪万博も終わりたいま、最大のイベントは何でしょうね」
「それは、つまり、湘南、ワールド、マラソン。
ゲゲゲ」
郷田は、驚きを禁じ得なかった。
同時に、麻暮の推理を確信もした。
日本一のスケールで展開される〈湘南ワールドマラソン〉は、今年は（外国人も含め）五万人以上が参加すると云われている。
しかも、一週間後の、九月四日開催である。
「ケケケ。
ボくらには、充分準備の時間はある。
むろん、〈Z〉にも充分準備の時間がある」
「全面对決ですか」
ギャバンが呟くと、
「ボくら探偵は、刑事ではないから、事件を未然に防ぐ必要がある。
ケケケッ。
例えば浮気調査で、ホテルから出て来たところをキャッチするのは、素人探偵。
ホテルに入る寸前をキャッチして、脅して、依頼人からもターゲットからも、報酬を戴くのが、郷田探偵」

「あたしの名前を出さないでよ」
郷田はふくれる。
セリーヌもふくれて、
「私たちだって、事件を前もって防げるのなら、そうするけど、うんこをしてないのに、ケツは拭けない」
「なら、それでいいとして。
さっき郷田さんの口から出た、その盗聴なんだけど」
「西園寺邸を盗聴するってわけね」
「いや、郷田邸が盗聴されている可能性が高い」
「まさか、いえ、ありうるわね」
「そう、郷田さんもお存知の通り、荒野は、いや金時は、転んでタダで起きるやつではない。
ボクが殺した方の双子美人か、ボクが見逃した方の双子美人かは不明だが、どちらかが、この屋敷に盗聴器をしかけたはずだ。
しかもおそらく二つ」
「あちゃー、困ったさんね」
「だがそれは、ボクらにとって、好都合なわけさ」
「その盗聴器のありかを探して、嘘の情報を連中に与えるってわけね」
「ケケケ、その通り」
「でも、見つけるには、あたしの家が大きすぎるわねえ」
冗談よというつもりで郷田は笑った。
しかし麻暮は真顔で、
「それはそうだが、盗聴器を付ける方の気持になれば、すぐに見つかるさ」
「それはそうね」

麻暮の云う通り、盗聴器は翌々日に見つかった。
二階の麻暮の部屋の赤ちゃんベッドの下と、外の駐車場の屋根の隅にあった。

二〇三一年、九月一日、午後一時。

「それでは、打ち合わせ通り、よろしく申し上げます。
目的は、〈Z〉を誘き寄せて、壊滅することです。
それには、面の割れていないボクが前面に立って対応するしかありません。
念を押しておきますけど、セリーヌさんは逮捕したいでしょうが、自爆っていう手段を持っているテロリストの逮捕は、鼠が猫を取って食うより難しい。
尚、ボクらのコンセプトは、嘘も方便です。
それでは、打ち合わせ通り、よろしく申し上げます」

麻暮の合図で、まずはギャバンとセリーヌとが盗聴器の傍で大声で会話を始める。
「セリーヌ刑事さん、例えばフランスでは、イベントなどの警備や管理はどうするんですか」

「ギャバン君は、フランス人なのに、そんな屁みたいなこと知らないのかい」

「知りません」

「それは日本と同じで、警察の警備人が三割、ボランティアの管理が七割」

「警察の方は指揮する隊長さんがいるでしょうが、ボランティアを仕切ったりまとめたりするのは」

「それは、そのイベント会場に、ボランティア詰所を設置する。

そこでベテランの隊長が、仕切ったりまとめたりしてくれる。

マスかく手伝いはしてくれないけどさ」

「なるほど、実は僕も退屈なので、ボランティア活動をやりたいんですが」

「どういうボランティアなの。

まさかマスかく手伝いじゃないだろうね」

「湘南で日本一のマラソン大会があるそうです。

三日後なんですけど、間に合うでしょうか」

「そういうことなら、郷田さんに聞いてみればいい」

一時間後、今度はギャバンと郷田が、盗聴器の傍で大声で会話を始める。

「郷田さん、湘南マラソンは当然知っていますよね」

「あたしは湘南っ子よん。

湘南で知らないことなんかないわよ」

「あれのボランティアをやりたいんですけど、間に合うでしょうか」

「三日後スタートだけど、充分間に合うわよ。

なぜって、ボランティアが足りないって、騒いでいるもの」

「それは良かった。

僕はどこへ行けばいいのでしょうか」

「湘南ボランティアセンターの出張所が、マラソンがスタートする鎌倉の材木座にできているの。

そこに行けば、案外簡単に申し込みできるわ。

でも、指導とかもあるから、前日の朝が最終締めきりのはずよ」

「じゃあ、明日の夕方にでも行ってみます」

「あたしが一緒に行ってあげようか」

「いえ、日本語ができるから、一人で大丈夫。

郷田さんは、明日からセリーヌさんの東京見物で、しばらく留守にするんですよ」

「あら、そうだったわね。

ついでに云うと、麻暮さんは、赤ちゃんを預ける養護施設が決まったから、明朝インドへ立つのよ」

「麻暮さんがインドですか」

「そんな不思議な顔しないでよ。

じつは麻暮さんは、長いことインドで猟師生活を送っていたことがあるの。

その頃のお仲間がみんなお亡くなりになっているので、お墓参りに行きたいんですって」

「それはそれは」

「あたしも麻暮さんも忙しいから、あとは自分でバンバンやってね」

「了解しました」

二〇三一年、九月一日、午後十一時。

麻暮と郷田は一階の居間で向かい合っている。

当然、麻暮はインドに立ってはいないし、郷田はセリーヌを東京見物に連れてってはいない。

セリーヌとギャバンは二階で眠りこけているはずだし、麻子は養護施設にすでに預けている。

「麻暮さんに、折り入って、相談があるの」

郷田は、珍しく殊勝な声を出した。

「云わずもがなですよ、郷田さん。

ケケケ。

またパリに行きたいってことでしょう。

月見草が富士に似合うよりも、郷田さんにはパリが似合いますよ」

麻暮はわざと明るい声で冗談を云った。

「そうじゃないのよ、麻暮さん。

あたしがパリで、ずっと考えていたことなの」

麻暮の想像以上に、郷田の目は真剣だった。

「まさか、ギャバン君と結婚するって云うんじゃない」

「ないわ、それは、ないわ。

はっきり、云うわね。

探偵稼業を廃業したいの」

はっきり云った郷田は、深い溜息をついた。

麻暮も、浅い溜息をついて、

「探偵を辞めたいのは、ボクだって同じさ。

でも、他にすることもないし、荒野退治も終わっていないしね」

「それは、麻暮さんにおまかせするしかないわ。

もちろん、こんどの〈Z〉の問題は、あたしがパリから引きずってきたことだし、それを解決させてからね」

「他にやりたいことがあるんですね」

もとより麻暮に、反対する気持はなかった。

「何もしなくっても、生活は安泰だけど、そう、確かにやりたいことがあるのよ」

「ボランティア活動とか」

「似たようなもんだけどさ。

作家になって、『死んだる団2』を書きたいの。

昨年、山内参三さんが数え年百歳で亡くなったときから、考えていたことなのよね」

「え、山内さん、亡くなっていたの」

「麻暮さんともあろう方が知らなかったの。

尤も、新聞の訃報は隅っこにちょっとだけ」

「ううむ、見舞いにも葬式にも行けなかった」

「本人の希望で、お葬式は無し。

半世紀前に亡くなった奥さんの、雪絵さんのお墓に入っているわ」

「ううむ、ボクは散骨でよろしく」

「きっと、あたしが先よ」

「一緒かもしれないな。

しかし、郷田さんが『死んだる団2』ですか。

ボクが書くべきかもしれないが、なにせ文章力がない」

「まだ思案中、構想中だけど、『それからの死んだる団』というタイトルでね。

敵とか味方とかに関わらず、いままでに周りで亡くなった人たちの、鎮魂のためと、悪の権化の、悪魂を究明するために。

ミラボー橋から、セーヌ川を毎日眺めていたら、もう、あたしには、それしかないって思い込んでしまったの」

「そうですか。

ボクは郷田さんの変身を、賛同、応援したいですね。

何も協力はできないかもしれないけど、山内さんが『死んだる団』を執筆していた時代を知るボクとしては、何かアドバイスくらいはできるかもしれません。

一つだけお願いがあるとしたら、ノンフィクション・ライターの手内さんが、できなかったことを、郷田さんにはやってもらいたいのです」

「それはなんでしょう」

「山内さんは、現実の死の数々を見事に描いたけれども、究極の哲学的命題であるところの、〈死とは何か〉は書けませんでした。

郷田さんには、そのことを追究して戴ければ」

「そうね、あたしは、エピクロスの思想を信奉しているの。

【死はわたしたちに無関係である。なぜなら、わたしたちの存在するかぎり、死は現に存在せず、死が現に存在するときは、もはやわたしたちは存在しないのだから】」

「それはそうかもしれません。

しかし、十日後に死ぬと解っている病人にとっては、その十日間は死つまり〈無

感覚)を考え、生つまり(感覚)を失うことに精神的に苦しむことになるでしょう。

そしてその十日間がもし、肉体的にひどく苦痛なら、一時も早い無感覚を望むでしょう。

いずれにしても、遠からず無感覚つまり(非存在)になる生き物なんか、つまらんとは思いませんか」

「ありがとうございます、麻暮さん。

あたしも、あたしなりに、あれこれ考えてみるわ」

麻暮の反応が思いのほか親切だったので、思わず郷田は涙ぐんで低頭した。

二〇三一年、九月二日、午後四時。

鎌倉の材木座の、湘南ボランティアセンターの出張所の中央に、オカメン麻暮正作は居る。

出張所は、大きな立看板と小さなテントがあるだけの簡易なものである。

元鎌倉署署長の山風健一から現鎌倉署署長に筋を通してもらって、ここに偽の出張所を張らせてもらったのである。

大イベントであるし、仮装して走るランナーも多いので、担当責任者が仮面スタイルを、ボランティアのだれもが疑わない。

西園寺邸を見張っている、(西園寺に面が割れていない)ギャバンから机上の(郷田から借りた)タブレットに連絡が入り、四人組が西園寺邸を出たとのこと。

暗い空から、霧雨が舞い落ちてきた。

「マラソン日和じゃないか」

麻暮はぽつんとつぶやいた。

純朴な若者相手に、インチキな受付を十人余り済ませた後、四人のグループがやってきた。

各人仮装して、小振りだが、それなりに重そうなリュックを背負っている。

(おいでなされたな)

と麻暮は思った。

受付を済ませると、麻暮は、外国の人には具体的な説明と指導しなければならぬと云って、自分で先に立って材木座の砂浜まで誘導した。

四人組は大人しくついてきたが、あらかじめセリーヌと郷田が待っている地点まで来ると、急に色めき立った。

セリーヌが顔を白塗りにしたコテに声をかけ、お互いフランス語で怒鳴りあった。

パンダのお面をかぶったフランコに、郷田は声をかけた。

体型ですぐに解ったのだ。

「教授、またお会いできたわね」

「郷田さん、日本で再会できて、嬉しい思いです」

そのとき、二人の女（小金井豊子と山本久子）が小走りに逃げた。

海岸線を百メートルほど走ったところで、行き迷った二人は、今度は水平線に向かって走り、先方に見える二艘のクルーザーめざして泳ぎ始めた。

追っていた麻暮は銃を取り出し、相手のリュックめがけて続けざまに二発撃った。

二つの強烈な爆発音と共に、海水が十メートルほど鋭く立ち上った。

目撃したフランコとコテが固まった。

郷田はフランコに飛びつき、セリーヌはコテに飛びつき、取り押さえた。

リュックを奪い、できるだけ遠くへ放り投げた。

セリーヌが素早く、二人に手錠と縄をかけた。

麻暮が戻ってくると、フランコが毒づいた。

「かよわい乙女二人に、あんたは何をしてくれたんだ」

麻暮は淡々とした声で、

「その言葉は、君にそっくりお返しするよ。

ボクは自爆のお手伝いをしてあげただけだよ」

二〇三一年、九月二日、午後六時。

郷田邸、郷田は麻暮に文句を云っている。

キッチンにいる郷田は、愚痴っぽい口調で、口角泡を飛ばしている。

「小金井豊子と山本久子を、どうして殺してしまったのよー。

あたしの『死んだる団2』、いえ『それからの死んだる団』の重要参考人だったのよー。

すくなくとも、あたしたちは、小金井豊子と山本久子について、何も知らないのよー。

ジャーナリストの父を持つあの子たちが、どうしてテロに走るようになったのかー。

いえ、それ以前に、あの子たちの青春はどういうものだったのかー。

フランコ教授とは別の理由で、あたしは納得いかないわ。

あたしたちは探偵であって、必殺仕事人ではないのよ」

居間で麻子を抱いている麻暮は、淡々と応える。

「郷田さん、それはごもつともです。

でも、あの二艘のクルーザーに乗っていたのは、どういう人たちか、さすがのあなたでもご存じないでしょう。

あそこに乗っていたのは、湘南マラソンを見学にきた、湘南の養護施設の児童二百七十人と、関係者三十人の計三百人です」

「そ、そ、そ、で、で、で、それでも、麻暮さんなら生きてまま捕まえることができたんじゃないのー」

「でも、ボクは、三百人を救うために、殺したわけではないのです。

ボクは慈善家ではないし」

「そんならどうしてよ」

「理由なんか、ボク自身には解りません。

ボクが相手を倒すのは、理由があるからではなく、いわばカンです」

「そのカンをうまく使えば、生きてまま捕まえることができたんじゃないのー」

「そうするには、神様に、ボクの年齢を半分にさせてもらわないと。

ボクのカンが、ボクに、あの二人の乙女を、殺すことを決めさせたのです。

郷田さんには悪いけど、我れことにおいて後悔せず、自他ともにうらみかこつ心なし。

ケケケ」

郷田は鼻白んだ。

郷田は、

(いずれ、麻暮さんと、決着をつけることになるわね)

と思ったが、そのいずれがいつかは、まったく予想ができなかった。

二階の奥の部屋では、セリーヌとギャバンが、フランコとコテを拘束している。セリーヌは、二人をパリに強制送還してもらいたい。

それから訊問してもいいのだが、すでに郷田から、

「郷にいれば郷にしたがえ」

と釘を刺されているので、さすがに困惑している。

セリーヌはフランス語で、フランコとコテに話しかける。

「君たちのリュックの中には、どういうわけか、爆発物はなかった。

それぞれ、スペルマ臭いタブレットがあるばかりだった。

つまり、今回の自爆テロ要員は、雌豚二頭だったわけか。

君たちだけ、生き延びて、その後、何をする気だったのか」

固く縛られ、手錠や足枷までされた、フランコとコテは、口を真一文字に結んでいる。

それ以前に、セリーヌが、

「おまえはどうして、Zなんかの仲間になったのか」

とコテに問いかけたときも、コテは口を開かなかったので、答をあてにしていたわけではない。

つまり、セリーヌは、自分自身に問いかけていたのと同じなのだ。

ためしにギャバンが、二人の足の裏をくすぐっても、何の反応も見せない。

「足の裏が固いと云うか、頭が固いと云うか、意志が固いと云うか」

ギャバンがぼやいていると、階下から麻暮がやって来た。

優しいオカメンの顔と声で、

「セリーヌさん、ギャバンさん。

下にお茶と軽食の用意ができていますよ。

捕虜の見張りはボクがやりますから、ごゆっくりどうぞ」

セリーヌとギャバンは、嬉しそうな顔で下に降りて行く。

フランコは、しぜん五体がふるえてくるのを感じた。

そして、このふるえは、当然のふるえだと感じた。

西園寺金時＝荒野大三郎から、麻暮正作のことは、耳の奥が腐るくらい、何度も聞かされていた。

ふるえながらフランコは、荒野の言葉を反芻している。

（私を知る人間は、私をおそろしい人間だと云うが、私のおそろしさには、理由がある、思想があります。

あるいは、理想があります。

あなたがたのテロリズムに、理由も思想も理想もあるようにね。

だが、麻暮のおそろしさには、理由がない、思想がない、理想がないのです。

言語道断のおそろしさであって、奇々怪々のおそろしさであって、そのおそろしさの地獄は、闇は、私の百倍は深く、濃いのです）

そのときフランコは、

（そんなことはありえない）

と考えていた。

（もし、そういうおそろしさが、あるとしたなら、それは、狂人のおそろしさであって、狂人には探偵など決してできない）

だが、フランコいわく「かよわい乙女二人」を、瞬時に、まったく何も思っていないという風に撃ち殺した、その麻暮の姿は、たしかにフランコには、無思想の人間の行為としか思われなかったのである。

そのとき、コテが独り言ふうに、ぼつんと云ったのだった。

「麻暮というやつの銃の腕は、もしかすると、自分以上かもしれない」

フランコも、また、ぼつんと云う。

「マラソンの受付を装っていたのが、麻暮だと解ったならば、こんな体たらくにはならなかった。

しかし、荒野さんも、麻暮があんな豚女みたいなお面をかぶっているなんて、教えてくれなかった」

そして、フランコはこう付け加えた。

「せっかく、コテに仲間になってもらったのに、このザマで、申し訳ない」

「それは自分の考えなので、謝る必要はありません。

もともと、自分は、体制側に使われることに、嫌気がさしていたんです。

自分は、犬ではなく、鷹になりたかったのです」

セリーヌには云わなかったことを、コテはフランコに云った。

「さてと」

麻暮が独り言を云うと、フランコはまたしてもふるえてきた。

セリーヌとギャバンが卓上で、ハーブティーを飲み、ミックス・サンドイッチをばくついていると、二階から断末魔の叫びと云っても過言ではない、凄まじい叫び声が聴こえた。

ギャバンがおそろおそろ、
「郷田さん、あれは、どういうことですか」
郷田は苦虫を噛み潰した顔になって、
「拷問よ」
「ゴーモンって、何ですか」
ギャバンが聞いた。
「あの手この手で、自白を強制することよ。
あの手は、例えば、ペンチで指を剥がす。
生牡蠣の殻を剥くときのあれよ。
この手は、例えば、カッターでチンチンを殺ぐ。
きんぴら牛蒡を作るときのあれよ」
「ギャー、日本人って、残酷」
「残酷な日本人なんて、滅多にいないわ。
そのメッタメタの一人が、麻暮先生。
まったく、必殺拷問人でもないのにさー」

断末魔の凄まじい叫びは、何度も聴こえた。
郷田は、首をふりふり、
(麻暮さんったら、どんだけ暗いんだか)
と、妙にやるせない気分になった。
「ヤダヤダ、僕、パリに帰らせて頂きます」
ギャバンが泣き顔で云った。
セリーヌが慌てて二階に戻ろうとするのを、郷田は止めて、
「日本の警察もパリの警察も甘いから、何度も同じような事件が起こるのよ。
あたしはさあ、人間平等とか人命尊重とかも嫌いだし、ましてや弁護士じゃないから、犯罪者の人権なんて眼中にないのね。
あたしなんかにくらべれば、麻暮さんはずっと紳士的な人よ」
いささか心にもないことを云った。
「パリで郷田さんを知って、日本には凄いバンパイア探偵がいると、驚愕したもののだが、日本で麻暮さんを知って、日本には恐るべきフランケンシュタイン探偵がいると、愕然としている」
セリーヌはいささか興奮した口振りで云って、天井を見上げた。

たしかに二階では拷問が行なわれていた。
それは、郷田が話した例よりも、ずっと陰惨なものであったが、麻暮は平然とし

た顔で降りて来た。

淡々とした口調で、

「解りましたよ」

郷田、セリーヌ、ギャバンの三人は揃って立ち上がった。

「まあまあ、そのまま、坐って聞いてください。

フランコとコテの、リュックに入っていたタブレットは、郷田さんのタブレットよりもずっと新しいもので、ZOとか何とか云っていましたよ」

「ああ、〈ZOO〉ね。

パリのIT会社〈ZZ〉で開発された、爆発的人気の新型機種よ。

世界のニュースが、いち早く確認できるし、画面がすこぶる鮮明だから、『それからの死んだる団』はそれを駆使して、映像入りの電子出版として書くつもりなのよ」

「郷田さん、危ないところでしたね」

「まさか、〈ZOO〉のタブレットを使うと、突然通信手段が断たれるとか、誤作動とか、ウイルス発生とか」

「そんなことなら、ソフトバンクのスマホなんかでもあったよね。

世界で現在一千万台と云われ、現在も延び続けている、あのタブレットを、一斉に爆破させる。

そのことが、あの二人の持っていたタブレットで、可能ということです。

もちろん、専門的な操作技術が必要でしょうが、フランコ博士はそれを修得したか、修得する寸前だったらしい。

しかし、その最後のボタンを押すと、そのタブレットすらも爆破してしまう。

そこで、射撃名人のコテが、まだやることがある、フランコにとっては、どうしても必要だったわけですね」

三人は顔を見合わせ、しばし言葉を失っていたが、

「げげげ、これがホントのサイバー・テロってわけね。

となると、もしそれが実行されていたら、少なくとも一千万人が吹っ飛んじやったってことよね」

「どのレベルの爆発かは白状しなかったけど、推測するに、身近に居る人たちも含めると、被害者は一億人か」

「ああ、やだやだ、あたしにはもう、対応しきれないわ」

「郷田さんは対応できなくとも、現実を見据えなければならぬでしょう。

なぜなら、フランコのパトロンは、西園寺金時、つまり荒野大三郎なのですからね」

「やっぱり、そういうことなのね」

「取りあえず、セリーヌさんとギャバンさんに、パリに帰って戴く。

その〈ZZ〉に乗り込んで、〈ZOO〉サーバーを抹消してもらえばいいでしょう」

セリーヌは、口髭を蠢かせつつ、

「うん、こ」
と云った。
それから、おもむろに、
「独断で、断固うんこ、フランコとコテも連行する」
ギャバンは首を振って、
「僕は、郷田さんのところに残りたい」
郷田は苦笑して、
「あんた、うちで何するのよ」
「秘書、いえ、執事。
こんな大きなうちには、執事が必要でしょう」
「あたしは、主人兼召し使いだから、必要ないわ」
「それなら、探偵補佐」
「探偵稼業は卒業するのよ。
だから、補佐も不要」
「それなら、男めかけ」
「あたしにだって、撰ぶ権利はあるわ」
「それなら、居候」
「そんな言葉知っているやつを、居候にはさせられないわ」
「それなら、領収書の計算」
「あんた、あたしがそれが趣味なの、知っているの。
それに、あたしは作家になるのよ。
作家に、領収書の計算は要らなくなるわ」
「それなら、翻訳やります。
郷田さんの本を、フランスで出版するために」
「日本でも売れるかどうか解らないのに、意味ないわ」
「それなら」
二人の会話が堂々巡りなので、セリーヌが口をはさむ。
「ところで、物音すらしないけど、あの二人は生存しているの。
すかしっ屁ほどの息はしているの」
麻暮は、やはり淡々とした口調で、
「気を失っているだけです」
それから、天井を見上げ、
「ケケケ」
と笑った。